

41622

教科書文庫

4
810
41-1933
20000 65652

59

1931

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

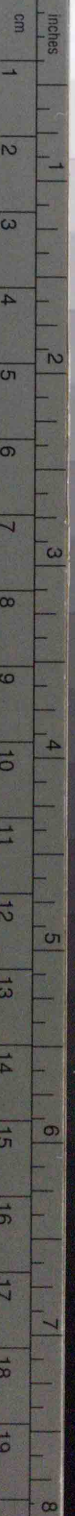


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

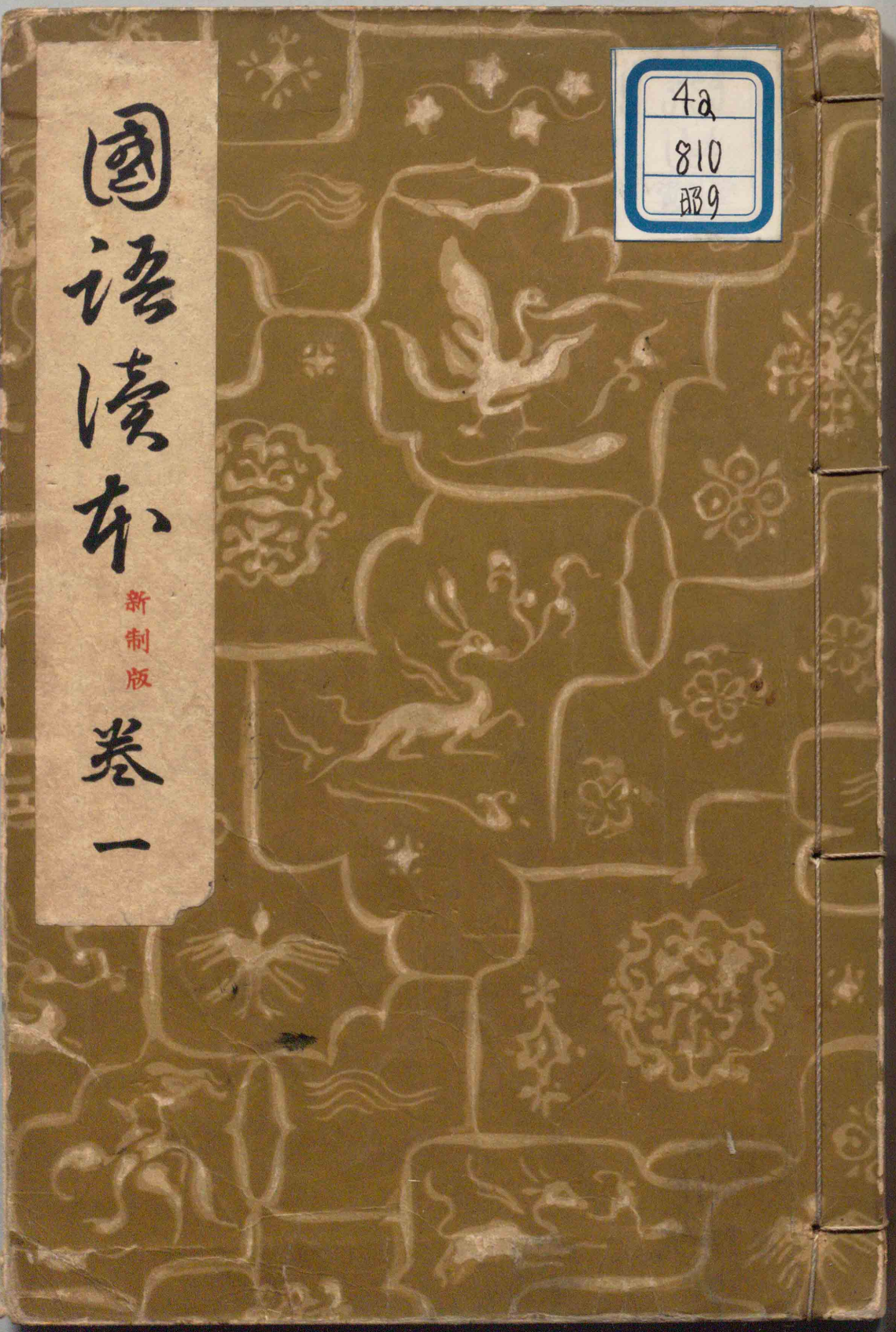


4a
810
BB9

國語讀本

新制版

卷一



資料室

文部省檢定

昭和八年二月廿五日
昭九七年七月廿四日

國語讀本 卷一

新制版



文學博士 上田萬年
榮田猛猪 共編
鹽野新次郎

3159 42
Ue 4 810
AB9

國語讀本卷一

目次

一 菊の香	石井國次 一
二 人生の曙	大島正徳 一一
三 若き生命	三木露風 一六
四 木のぼり	前田夕暮 一八
五 競漕	久米正雄 二三
六 遍路	萩原井泉水 三一
七 猫の作戦	夏目漱石 三七
八 ポチ	長谷川二葉亭 四五

九 菖蒲

島崎藤村 五三

一〇 心の修行

村井弦齋 六一

函人

中村栗園 六五

一一 鮎のかけ

室生犀星 六六

一二 水郷めぐり

高濱虚子 六八

一三 鳥居強右衛門

湯淺常山 八一

信玄の二士

大槻磐溪 八五

一四 人間の大小

薄田泣菫 八六

一五 親ごころ

九〇

一 酒匂なる二兒へ

大町桂月 九〇

二 米澤なる愛兒へ

五十嵐力 九三

母雞の愛

宮下正美 九六

一六 手紙の懐かしさ

前田 晁 一〇〇

一七 無線電信

水上瀧太郎 一〇四

一八 乃木大將

森 鷗外 一〇九

嗚呼此の一語

土屋鳳洲 一二四

一九 雲の峰

國富信一 一二五

二〇 洋上の月

服部純雄 一二二

二一 グラフ、ツェッペリン號に乗つて

圓地與四松 一二九

二二 丘のほとり

福田正夫 一四一

二三	初秋の窓から	相馬御風	一四四
二四	童心	北原白秋	一五〇
二五	障子	鶴見祐輔	一五九
二六	ボーイスカウト	三島章道	一六三
二七	安井息軒	森鷗外	一七二
二八	三計塾の記	安井息軒	一八一
二八	修養三題	柳澤淇園	一八二
二九	國歌と國旗	芳賀矢一	一八六
目次終			

國語讀本 卷一

一 菊の香

石井國次

石井國次
茨城縣の人。教育
家。學習院教授。

我が天皇陛下の允文允武におはしまして、萬民の上に君臨せらるべき聖徳を具へさせ給ふことは申すも畏きことながら、御幼少の砌、學習院御在學中の御事どもを拜し奉るにつけても、洵に感佩に堪へぬことが多いのであります。まづ第一に驚嘆し奉るは、御記憶の拔群にあらせられることとであります。私は今まで多くの學生に接して参りま

したが、陛下のやうに御記憶の強いお方は見受けたことがありません。蟲の名でも貝の名でも、聯絡も系統も無い事



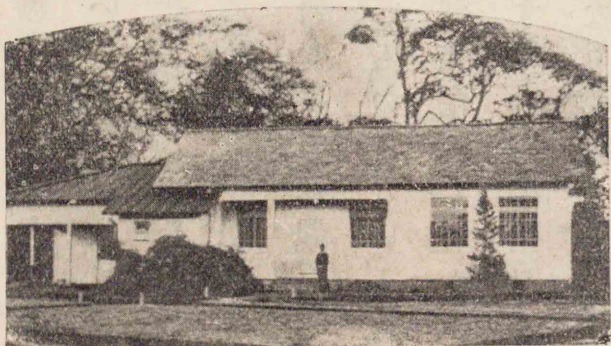
御研究所内の天皇陛下

まで、一度御覚えになつた以上は、決して御忘れになるといふことがありません。かく御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でもいゝ加減にして置く事が御嫌ひで、詳細に御質問になり、又御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へば歴史で聖徳太子の事を申し上げると、御歸りになつて参考書を御調べになり、聖徳太

三寶
佛法僧。聖徳太子の憲法の第二條に「篤く三寶を敬へ」とある。

蝶類圖説
岡崎常太郎著。蝶の各種類を圖によつて説明したものである。

子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふ事かと御研究になる。理科で蝶の御話を申し上げると、「蝶類圖説」を御調べになつたり、盛に御採集になつたりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまでも御觀察になる。或は電氣の御話を申し上げれば、種々の器械を御取寄せになつて實驗遊ばされ、無線電信電話の事まですつかり御理解になるといふ風であります。旅行登山の御趣味も御豊富にあらせられ、單なる御運動としての



生物學御研究所

山

外に、地圖や案内記をよく御調べになり、其處の産物や、動物、
鑛物から氣象の事まで熱心に御研究になる。萬事がかう
いふ風であらせられるから、御知識の確實で且深みがあら
せられる事は、實に驚嘆し奉る外はありません。

明治神宮に參拜して明治天皇の日常御使用になつた御
調度品を拜觀した者は、誰でも其の御質素なのに感泣しな
いものはないと思ひますが、陛下も亦その御遺傳のためか、
御感化のためか、華美が御嫌ひであらせられます。それで
すから、御學用品等も全く一般學生と同様な品を御使用に
なり、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを好んで御使用に
なりました。而もそれがごく短くなるまで御棄てになり

明治神宮
明治天皇・昭憲皇
太后を奉祀する神
宮。東京市澁谷區
に鎮座。

ません。消ゴムも當時四五錢位のを、豆粒位になるま
で御使用になり、雜記帳でも、半紙や畫用紙でも、決して無駄
には遊ばしませんでした。

それで、大正三年三月、陛下が初等科を御卒業あらせらる
るや、御高德を一般兒童に拜せしめたならば、國民教育に裨
益する所があるだらうと考へて、陛下の御使用になつた背
囊、教科書、雜誌、筆入から、帳面、鉛筆、ゴム、並びに御製作になつ
た手工品、圖畫標本等を拜借して一室に陳列し、御教室御控
室等すべてを公開して、一週間に互り、市内及び近縣の小學
兒童に拜觀せしめたことがあります。其の時、毎日何千と
いふ兒童が校長、教員につれられて參り、私共は手別けをし

リボン
Ribbon.

て種々説明を致したのであります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、女の子で、かなり綺麗な服装をして、幅の廣いリボンなどをつけて來た一組がありました。私が其の女生徒たちに説明をしてから、「皆さんは、殿下でさへかやうに御質素であらせられる事を拜見したら、もう立派な着物だの、幅の廣いリボンだのを家庭でおねだりが出來ないでせうね。」と申したら、たいそう感激して泣いた生徒が随分ありました。

陛下は又非常に規律正しいことが御好きであらせられます。朝の御起床から御拜御食事御通學御復習御運動御入湯御寢まで、實に規則正しい一日の御日課を御守りにな

つて、御變更になる事は容易にありませんでした。従つて色々の事を遊ばすにも、すべて規則正しい御計畫をお立てになつて、組織的に遊ばすといふ風であらせられます。

陛下はまた實に公平無私であらせられます。例へば戦争ごつこをやつたあとで、私が其の審判や講評など致します時、御自分の方に不利な事がお有りになつても、少しもお包みなく御申出になる。角力で、陛下が相手をお投げ遊ばされて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣附かなかつた少しの踏切などが御自分にお有りになると、私に踏切があつたから負です。」と御主張になる。審判者や行司が少しでも不公平な判定をすると、非常に御嫌ひになる。仲間の者が、

「其の方が御都合がお宜しいではございませんか。」などと申し上げると、「そんな不正直な事はいけない。」と仰せになる。従つて、歴史上の事柄を御批判遊ばされる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案をお下しになる。實に陛下の御心は少しの曇もない明鏡であらせられます。それゆゑ陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと顯れて、隠すことは出来ないのであります。

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の少ない方で、御世辭などは仰せられないが、誠に思ひやり深くあらせられます。従つて御幼少の時分から、普通の子供に有りがちな、友達にからかふとか、意地悪い事をするとかいふやうなことは決しておありになりませんでした。

そして御學友に對しても、御側の者に對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍従や侍従武官などにも、新舊の差別なしに優しく御接しになるさうです。而も舊い人をいつまでも御忘れにならずに、元の侍女や御學友などが御伺ひ申すと、大變に御喜になりますし、時々の御召もあります。私どもにもやはり其の通りで、御誕辰其の他の御祝にはきつと御召があり、御機嫌伺に出れば、特別に拜謁を許され、御暇の時は何時までも御引止めになつて御言葉を賜ふのであります。先年御外遊の御時には、私はロンドンやパリで御迎へ申し上げまし

たが、屢、御召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも、先生、先生と仰せられるので、覺えず無上の光榮に感泣した次第であります。人心がだん／＼荒んで、師恩を忘れるどころか、全くこれを念頭におかないやうな青年學生の多い今日、陛下のかゝる御態度は、實に貴い御模範ではありますまいか。

陛下の御盛徳を稱へ奉ることは、到底私どもの能くするところではありませんが、要するに陛下は御天性實に間然する所の無い御方で、現あきつ神としての神々しい御性格を先天的に御具へあそばしていらせられると申し奉る外はありません。（教育研究）

二 人生の曙

大島正徳

大島正徳
神奈川県の人。倫
理學者。東京帝國
大學講師。

少年はいつまでも少年である。やがて青年となり大人となる。大人となれば、世の中に對して人たる責任を身に負はねばならぬ。人がこの責任を感じるやうになるのは、小學校を卒へた頃からで、例へば、曙の光がほの／＼と山の端から射すが如く、自分の心にだん／＼と世の中が見え初めて来る。

小學校に居る時分は、爲すべき事といつては、日々の課業を勵むことであり、又その欲する所は、山に行き、川に遊ぶといふやうな事であつたが、一たび小學校を卒へると、先づど

うして此の世に立つて行かうかと考へる。何になり、何をしたらよいか、自分の性質をも顧みて果して如何なる仕事に適してゐるかなど考へる。世の中の事に對しても、善い悪いの分別もついて来る。こゝに自己を修養するの必要を感じ、志を立てねばならぬことを覺り、又自分の任務を知り、さてはこの社會國家を改善して行かうなどといふ大きな望をも起す。かうして少年の心は人生の曙に目覺めるのである。

曙の空は爽快であり多望であるやうに、人生の春に立ち、曙に臨んだ少年の心は、何のわたかまりもない極めて望の多いものである。同時に少年の多くは空想家である。前

途にしたいと思ふことが數限りなく心に浮び起つて、恰も夏の雲の湧き出るやうである。

けれども、人にはそれ／＼の性質があり、事情があり、境遇があつて、誰しもが思ふまゝに何事でもする譯にはいかない。そこで自分の性質、境遇、事情を考へ、父兄、長上とも相談して、世の中に立つて行く方針を定めねばならぬ。商業なり工業なり農業なり、その他何にせよ、一定の職業を執つて世に立つことを心に決めねばならぬ。そして愈、或一定の職業に志を立てたならば、前人の歩いた道を辿るばかりでなく、自分の正しい新しい考によつてその執るところの仕事を改良し、自らも進み、世をも進めて行く覺悟がなくては

ならぬ。

さて、人生の曙に目覺めた少年は、先づ心を静めて、人生の最も尊いことは何であるかを考へて見るがよい。抑、人生の最も尊いことは、一個の人間として立派なものになることである。人は富あり名譽あり學問ある人に對すれば、或は羨み或は妬むけれども、心から感ずることは殆どない。然るに人間として尊ぶべき立派な行のある人に對すれば、誰しも心の底から感ずる。羨みも妬みも忘れて、只その人を仰いで尊く懐かしく感ずるものである。かういふ感心すべき人は、農夫にもあり、商人にもあり、その他如何なる職業、如何なる境遇の人々にもあり得る。故に我々はたゞ富

あり名あり知識あることのみを務めて、世の中の人をして單に羨ましめ妬ましめることを願はうよりも、寧ろ立派な行をして、心から感ぜしむべきである。人を感ぜしむる力は、他人の心に力を與へ生命を與へるものである。我々は、心を誠にし、自ら進み、人を愛し、人を敬ひ、人の善を喜ぶやうな立派な人間となることが肝腎である。かゝる人が、眞に他人を感ぜしめる尊い人である。

要するに、自分の境遇、位置、性質等を考へて、自分の方針を一定すると同時に、その境遇、職業の如何に拘らず、人間として立派な一生を送らうと覺悟するのが、人生の曙に立つものの、第一に心がけねばならぬことである。(公民道徳)

三木露風
名は操。兵庫縣の
人。詩人。

三 若き生命

三木露風

萌えよ 春の草
生ひよ 野邊の草
あたらし夢をはぐくみて
春の生命をのばせかし
長き眠の冬の土
いつしか覺めてよみがへり
芽をふく千草八千草の
生の力の不思議さよ

小川の水は温みたり
日は晴れ空は薄霞み
つくみやひわや鶯や
さやかにあそぶ彌生月
萌えよ 春の草
生ひよ 野邊の草
緑の褥をしきつらね
若き生命を飾れかし

(青き樹かげ)

前田夕暮
名は洋三。神奈川
縣の人。林業家。
歌人。

四 木のぼり

前田夕暮

青桐の幹は青くてすべ／＼してゐる。まして二十年生
ぐらゐの若木の快い幹の肌ざりは、冷たくて、たつぷりと
水をふくんでゐる。樹皮をすかして青い繊細な神経が感
じられるほどである。

私の子供がその青桐の木に登らうとしてゐる。子供は
全身的に幹に抱きついて、背をまろくして三四尺ほどやつ
との事で登る。若木の青桐は、空にひろげた若葉を、梢の方
でびり／＼と軽くふるはしてゐる。

子供は顔を眞赤に染めて、瞳を黒く光らせながら、また五

六尺のところまで登つて、暫くちつとこらへてゐたが、する
するとすぐに滑り落ちてしまふ。

子供は滑り落ちてしまふと、暫くの間は胸を小鳥のやう

にふくらませながら、
樹を高々と仰いでゐ
る。

子供は意を決する
もののやうに、上着を



青桐と子供

地面に投げつけて、今度は勢ひ猛に登りはじめる。両手で
しつかり樹を抱きしめて、靴の踵を樹の肌につけて、遮^{しゃ}二無^む
二登^につて行く。が、子供の體は一尺ずりさが

り、三尺登つては二尺ずりさがる。そして五六尺の高さまで行つて力が盡きたのか、またするくくと地上に滑り落ちるのである。

もうあきらめてやめるだらうと思つて、私は少し離れたところから見てゐると、子供は靴をぬいで、一二間さきの方へぼんと投出して、跣足になつて、足の裏に砂をまぶしつける。そして樹に飛びつくやうに抱きついて、からみつくやうな體のうねりを見せてから、うんくとうめきながら、手も顔も眞赤にして登りはじめる。私は見てゐて少し苦しくなつて來たので、餘程とめようと思つたが、それでも、私までが全身に力をこめて、思はず子供と吐く息吸ふ息を合せた。

子供は忽ち五六尺のところまで登つて、ちよつと考へてゐるやうであつたが、何の造作もなくまたするくくと滑り落ちて、さすがに疲れたと見えて、倒れるやうに地べたに寝そべつてしまつた。そして寝ながら青桐の梢を仰いでゐるのだ。

○子供は寝てゐる間にすぐに疲労を回復したと見えて、忽ち起きあがつて、今度は襯衣もズボンも脱ぎすてて、猿股一つになつて、側においてある支那製の水甕へ片手を入れて、掌で水をすくつて口うつしに飲んだと思ふと、日光の方に向つて、ふうと霧をふいて、腹を大きく膨らませたり低くし

たりしてゐたがまた足の裏に砂をまぶしつけて、ちよつと上を仰いで見て、更に勢ひ猛に樹にとびつく。青桐は少しゆらくと揺れる。

今度はみるゝ間に六七尺ほど登る。第一の下枝が頭のすぐ二三尺上のところにある。子供は滿身汗にまみれ、全身朱に染まつて、兩手を長くのばせるだけのばして、幹を抱いたかと思ふと、縮めてゐた足が同時にのびる。と、もう兩手を上にぐつとのばしてゐる。そして下枝に片手をかけたかと思ふと、ひらりと身を跳らせて、その枝の上に立ちあがつた。そして私の方を見おろして、「おーい」と大きな聲をして呼ばつた。「おーい」と私も思はず手をあげた。

青桐の葉といふ葉は、風にゆられながら日の光を受けて、きら／＼と喜ばしげに光る。(綠草心理)

五 競 漕

久 米 正 雄

久米正雄
長野縣の人。小説家。
學校 東京帝國大學。

競漕の日は來た。空は朝から美しく晴れあがつた。學校の學務室から小使が朝早くやつて來て、合宿所の前に樺色の大きな旗を立てた。それがいかにも晴れがましく見えた。

午後になると晴れたまゝに風が吹いて來て、應援船の旗をはた／＼と鳴らした。コースには可なり荒い波が立つた。愈、競漕が始らうといふ頃になつたら、珍しい夕風が來

コース
Course. 航路。水路。

ユニフォーム
Uniform 制服。

臺船
棧橋につないだ方
形の船。棧橋から
端艇に移る便に
供する。

た。

選手は皆樺色のユニフォームを着た。土手では観衆が一種の尊敬と好奇の念を持つて、此の樺色の衣服を着た選手達に道をあけた。

味方の短艇がまづ拍手に送られて臺船を離れた。二十本ほど漕いで、審判艇の差出す綱に繋留した。續いて紫の敵艇も繋がれた。

艇庫と土手と應援船から「樺あ。紫い。などといふ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を曳いて發足點へ向つた。艇は發足點の赤い浮標に着いた。水路を見渡すと、風は全く凧いでゐるのではなかつた。それは絶えず東北から

吹いて來て、艇首を左へ曲げた。私は氣が氣でなかつた。

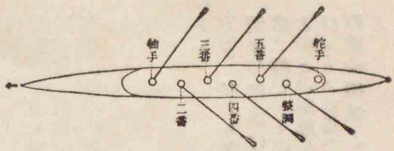
其の中に「用意の命が下つた。艇首は又一瞬間強風に曲げられた。」え、ま、ま、よ。もうなるやうになれ。」と眼を瞑つた。號砲が鳴り渡つた。用意と號砲の間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく長いやうに思はれた。二つの艇の櫂は同時に水に入つた。

味方の艇はどうも滑り出しがよくなかつた。「こいつはいけない、皆慌てたな。」と思つた。敵艇を見ると、確かに一二シートは此方より出



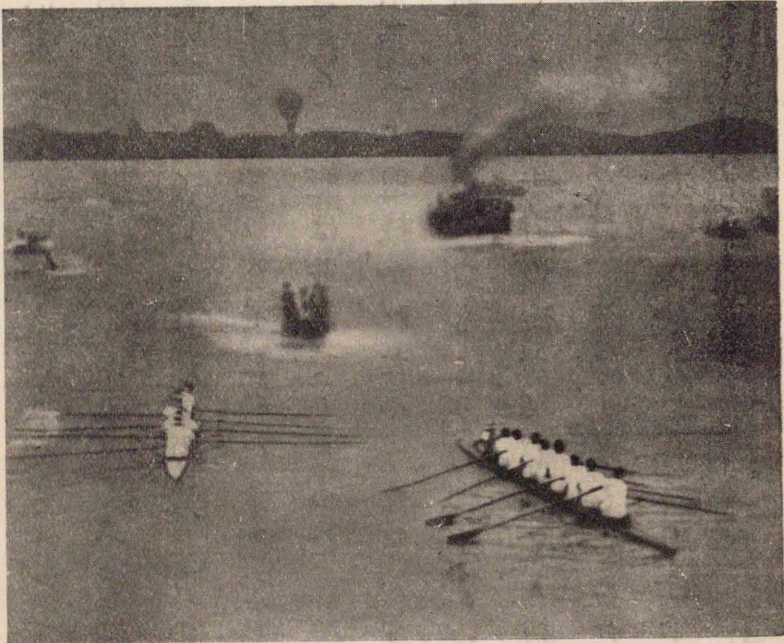
シート
Seat. ボート内で
漕手の腰掛ける
席。轉じてその席
と席との距離ない
ひレースの場合の
距離の標準とす
る。

漕手の位置



スブラッシュ
Splash. 水をはれ
とばす、と。

てゐるらしい。「ゆつくり。」と整調が叫んだ。私は更に大きな聲で、もう一度其の言葉を全艇に傳へた。皆の調子がやつと合ひ出した。此の時向うの紫の舵手が、「敵艇を抜く」と約半艇身。」と叫んだ。私は忽ち其の後を受けて、「嘘だぞ。」と怒鳴つた。今まで黙つてゐた私は、一度其の言葉をいつて了ふと、急に口の緊りが解けたやうな氣がして、恐ろしく雄辯になつた。其の中に紫の三番が一つ大きなスブラッシュをして、水煙が鮮かにばつと騰つた。機を得たと言はぬばかりに、私は、「やつたぞ、あんな大きなスブラッシュを。」と叫んだ。それを見た者、見ぬ者も、みな其の言葉に元氣づいた。敵の艇は沈黙してしまつて、間もなく二つの艇は並んだ。



五 競漕

そして水門前で、味方は約半艇身先んじてゐた。紫の舵手はそれでも、向うは、もうへたばつたぞ。」などといった。私も、なかに、此方が出てゐるぞ。」と應酬した。
水門まで來かゝると、私は、「さあ、水門だ。」と敵に先んじて叫んだ。

いかなる舵手でもいふにきまつてゐる場所の指示を、敵艇の機先を制していふのも、一つの戦術であつた。早くいつた方が、晚くいつた艇より先に其の場所に届いた譯だからである。後れ馳せに敵は水門で特別な力漕を十本した。それで亦艇は並んでしまつた。後から追附かれると、何だかずつと追抜かれたやうな氣がするものである。味方の艇は何だかいつもより船脚が遅いやうであつた。でも暫くすると、味方の艇が又じり／＼抜きだした。私は「此の調子で。」と叫んだ。敵は沈黙してゐた。そして渡場での力漕十本は効力がなかつた。整調は半眼で其の力漕を見やりながら、やつと安心してピッチを上げ出した。

渡場
隅田川の竹屋の森
をいふ。

ピッチ
調子。

ラストヘビー
Last heavy. 最後
の力漕。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。併し此處での半艇身ばかりの差では、敵のラストヘビーが利けば何の役にも立たない。私は「あと一分だ。もう死んでもいゝぞ。」と激励した。此の「あと一分。」といふ練習中に用ひ馴れた言葉が、何よりも選手を元氣づけた。一分間なら、いくらへたばつても漕げる筈なのである。

皆は疲れて來た。すると不思議に艇がよく出だした。味方の艇は、疲れて來ると、各個人の癖がとれて、全體としての調子が揃ふのである。協力は此の時始めて平均した。そして整調の權につれて、各は器械的に身體を前後に動かした。

ウインニング
Winning. 決勝點。

敵のラストも實によく出た。併しこれを見て氣遣つてゐる間に、味方の方のヘビーも非常によく利いた。多年の熟練で整調のピッチがぐんぐん上つた。「もう十本。」決勝點に入る迄は、随分長く感ぜられた。私はひよつとして、もうウインニングへ入つても、審判の號砲が發火しないのぢやないかと思つた。其の瞬間に號砲は響いた。皆は漕ぎやめて、艇内に身を伏せた。私は始めて此の時嵐のやうな喝采が水上に鳴り響いてゐるのを聞いた。これは決勝點に近づく時から盛に鳴つて居つたのであるが、私の耳には入らなかつたのである。「どつちが勝つたんだ」と、二番が苦しい息の中から情ない

聲を出した。

「安心し給へ。僕等だ。」と私は答へた。併し私自身も勝利を確信してゐるのではなかつた。そして審判所に掲げられた樺色の旗を見るまでは安心がならなかつた。喝采はまだ續いてゐた。今までに類のない程の接戦であつたのが、敵味方のいづれにも屬してゐない觀衆をさへ、熱叫せしめたのである。(學生時代)

六 遍 路

荻原井泉水

りんくといふ冴えた音が、遙か山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。

荻原井泉水
名は藤吉。東京市
の人。俳人。

弘法大師
僧空海。本姓佐伯氏。讃岐の人。眞言宗の開祖。承和二年(西暦九〇二年)に寂。年六十二。



お遍路さん

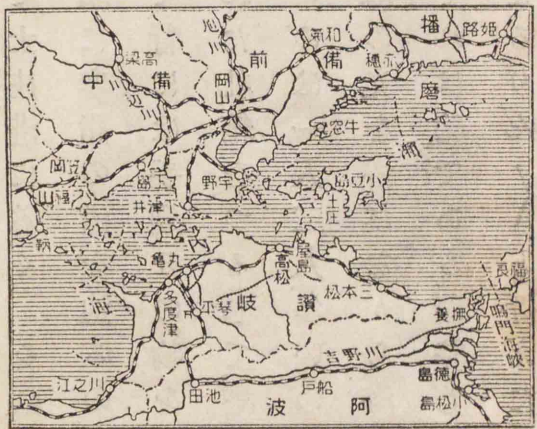
「お遍路さん」とは何といふ親しみ深い言葉だらう。四國八十八箇所に遺された弘法大師の靈場を、遍歴して歩くのがお遍路さんである。併し、如何に信仰のためとは云へ、四國を一周することは、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵の事ではないので、四國の代りに、この小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積み得る事とされてゐる。「島四國」といふ言葉も出來てゐる。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝると云ふことである。

小豆島
瀬戸内海に在る小島。香川縣に屬す。

岡山
岡山縣岡山市。
高松
香川縣高松市。
土庄港
小豆島の西岸にある港。岡山から十八里、高松から十二里。

岡山から、若しくは高松から來るお遍路さんは、多くは船で土庄港とぶらに着く。それから發足して第何番といふ札所の順に參詣の道を辿るのである。菅笠をかぶり、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を入れた札箱をつるして、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、淋しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀の様な海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道を辿つて行く。それは繪である。美しいことである。この山莊にまで聞えるりん／＼と冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に、路を歩く



近附島豆小

のに好い氣持であり、又農業も比較的ひまな四月頃一番多く見受けると云ふことだ。この頃島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して来る。一體遍路といふものが、何時の時代から始まつたものかは知らないが、大師の教門を弘くする上から言つても、お遍路さんは善いことだと思ふ。そればかりではない。

到る處で愛せられる、又恵まれる。お遍路さん同士も亦お互に遍路であると云ふことのために信賴する、又扶助する。是が實に善い事だと思ふ。未知の人達が道連になつて親しんで、行く路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷などを置けば、どの家でも喜んでくれる。決して紛失しないといふことだ。是は遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識から來るのだ。此の道に參ずるには、知識も修養も資格も、そんなものは何もいらぬ。婆さんでも娘でも男でも子供でも、たゞ一つの道を信ずる事によつて、此の尊い心持に一致することが出来るのだ。「南無大師遍照金剛」と讚仰する

聲が出て来るのだ。是は實に美しい事だ。争鬭と欺瞞とに満ちた社會の中にあつて、信賴と扶助とに心を合せて行き得る事ほど、美しい事が他にあるであらうか。此の島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてのみ美しいのではない。彼等が愛し合ひ信じ合ふ事に生きるが故に美しいのである。

而して此の事は獨り彼等お遍路さんの上の事のみではない。私達は皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならぬ物を負うて、自分の名前を書いた札を播き散らしながら、自分々々の路を遍歴してゐるのである。しかも私達の周圍には、此のお遍路さんに見るやうな信賴と扶助とが

行はれてゐるだらうか。私は思ふ、私達は此のお遍路さんに學ばねばならない、遍路といふ行事を遺した弘法大師の暗示を感じなければならぬ、而して人間の悉くがお遍路さんの心を心とするまでに到らなくとも、私達はまづお遍路さんの信と愛とを以て、人生を歩きたいものであると。

(山水巡禮)

七 猫の作戦

夏目漱石

吾輩はとう／＼鼠を捕る事に極めた。

元氣旺盛な吾輩の事であるから、鼠の一匹や二匹は、捕らうといふ意志さへあれば、寝て居てもわけなく捕れる。今

夏目漱石
東京の人。名は金之助。文學者。大正五年歿、年五十。

まで捕らぬのは、捕りたくないからの事だ。

春の日はきのふの如く暮れて、折々の風に誘はれる花吹雪が、臺所の腰障子の破れから飛込んで、手桶の中に浮ぶ影



石 澈 日 夏

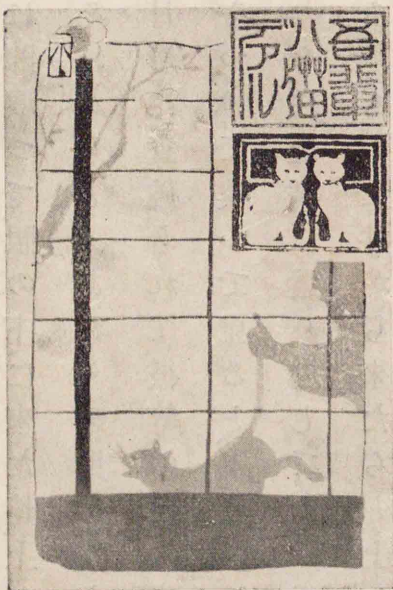
が薄暗い勝手用のランプの光に白く見える。今夜こそ大手柄をして、うち中驚かしてやうと決心した吾輩は、豫め戰場を見廻つて、地形を飲込んでお

く必要がある。戦闘線は勿論餘り廣からう筈がない。疊數にしたら、四疊敷もあらうか。其の一疊を仕切つて、半分は流し、半分は酒屋や八百屋の御用を聞く土間である。竈

は貧乏勝手に似合はぬ立派なもので、赤の銅壺がびか／＼してゐる。其の後の羽目板との間二尺が、吾輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近い六尺は、膳碗皿小鉢を入れる戸棚となつて、狭い臺所をいとど狭く仕切つて、横に差出たむき出しの棚と、すれ／＼の高さになつて居る。其の棚の下に挿鉢が仰向に置かれて、挿鉢の中には、小桶の尻が吾輩の方を向いて居る。大根卸挿粉木が並べて懸けてある傍に、火消壺が置いてある。眞黒になつた椽の交叉した眞中から、一本の自在を下して、先には平たい大きな籠をかけてある。其の籠が時々風に揺られて、大様に動いて居る。是から作戦計畫だ。どこで鼠と戦争するかといへば、無

論鼠の出る所でなければならぬ。如何に此方に便宜な地
形だからといつて、一人で待構へて居ては、てんで戦争にな
らぬ。こゝに於てか、鼠の出口を研究する必要が生ずる。
「どの方面から来るかな」と、臺所の眞中に立つて四方を見廻
す。何だか東郷大將になつたやうな心地がする。下女は
さつき湯に行つて、歸つて來ぬ、子供は疾くに寝た、主人は相
變らず書齋に引籠つてゐる、細君は何をして居るか知らな
い。時々門前を人力が通る。通り過ぎた後は一段と寂し
い。我が決心といひ、我が意氣といひ、臺所の光景といひ、四
邊の寂寞といひ、全體の感じが悉く悲壯である。どうして
も猫中の東郷大將としか思はれない。かういふ境涯に入

ると、物凄いな中に一種の愉快を感じるのは、誰しも同じ事だ
があるが、吾輩は此の愉快の底に、一大心配が横たはつて居る
のを發見した。鼠と戦争をするのは覺悟の前だから、何匹



吾輩は猫であるの表紙と挿畫

來てもこはくはないが、
出て來る方面が明瞭で
ないのは不都合である。
周密に觀察して見ると、
鼠族の侵入するには三
つの路がある。彼等が

若しどぶ鼠であるならば、土管に沿うて、流しから竈の裏手
へ廻るに相違ない。其の時は火消壺の蔭に歸路を絶つて

やる。或は溝へ湯を抜く漆喰の穴から風呂場へ廻つて、勝手へ不意に飛出すかも知れない。さうしたら、釜の蓋の上に陣取つて、眼の下に來た時、上から飛下りて一攫みにする。それからと、又あたりを見廻すと、戸棚の戸の右の下隅が半月形に食破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。鼻をつけて嗅いで見ると、鼠臭い。若しこゝから突貫して出たら、柱を楯に遣り過しておいて、横間から、あつと爪をかける。もし天井から來たらと、上を仰ぐと、眞黒な煤がランプの光で輝いて、地獄を裏返しに吊した如く、ちよつと吾輩の手際では、上る事も下る事も出來ぬ。まさかあんな高い處から落ちて來る事もなからうからと、此の方面だけは警戒

を解く事にする。それにしても三方から攻撃される懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる、二口ならどうにかかうにか遣つてのける自信がある、併し三口となると、吾輩も手のつけやうがない。どうしたらよからう、どうしたらよからうと考へて、好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣はないと極めるのが、一番安心を得る近道である。又法のつかないものは、起らないと考へたくなるものである。吾輩の場合でも、三面攻撃は必ず起らぬと斷言すべき相當の論據はないのであるが、起らぬとする方が、安心を得るに便利である。安心は萬物に必要である、吾輩も安心を欲する。よつて三面攻撃は起らぬと極める。

それでもまだ心配が取れぬから、どういふものかと段々考へて見ると、漸く分つた。三個の計略のうち、いづれを選んだが最も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出る時には、吾輩之に應ずる策がある。風呂場から現れる時は、之に對する計がある。又流しから這上る時は、これを迎へる成算もあるが、その中どれか一つに極めねばならぬ事になると、大いに當惑する。東郷大將はバルチック艦隊が、對馬海峽を通るか、津輕海峽へ出るか、或は遠く宗谷海峽を廻るかに就いて、大いに心配されたさうだが、今吾輩自身の境遇から想像して見て、御困却の段、實にお察し申す。

吾輩はかく夢中になつて、智謀を運らして居る。夜はまだ浅い、鼠はなか／＼出さうにない。吾輩は大戦の前に一休養を要する。(我輩は猫である)

八 ポチ

長谷川二葉亭

長谷川二葉亭
名古屋の人。本名は辰之助。號は二葉亭四迷。文學者。明治四十二年歿。年四十八。

ポチは朝起きた。僕の起きる時分には、もう疾くに朝飯も済んで、ひとつきり遊んだところだ。が、僕の聲を聞きつけると、何處にゐても一目散に飛んで来る。僕が急いで庭へおりるところを、ポチは透かさず泥足で飛びつく。細い人參ほどの赤ちやけた尻尾を懸命にふりたてて、嬉しさうに面を見上げる。見下す。目と目とびた

りと合ふ。たまらなくなつて、僕が横抱きに引ん抱く。ポチは抱かれながら、身をもがいて、大暴れに暴れ、僕の手を舐め、胸を舐め、顎を舐め、頬を舐め、舐めてもくく舐め足らない



長谷川二葉亭

で、悪くすると、口まで舐める。父が顔をしかめて、汚いくと言ふ。成程、考へて見れば、汚いやうではあるけれども、……しかし僕は嬉しい、止められない。

これが済むと、ポチもやつと気が済んだといふ形で、また庭先をうろくしだして、縁の下などを覗いて見る。と、そこに草鞋蟲の一杯たかつた古草履の片足が何ぞがある。

好い物を見つけたと言ひさうな面をして、それをくはへ出して来て、首を一つふると、草履は横飛びにぼんと飛ぶ。透かさず追つかけて行つて、又くはへて、ぼんと抛る。そんなたわいもない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。

その隙に僕は顔を洗ふ、飯を食ふ。それが済むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此の時が一日中で一番僕の苦痛な時だ。ポチが後を追ふ。うっかり出ようものなら、何處迄もくついて来て、逐つたつてどうしたつて歸らない。こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちやんと知つてゐて、其の時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つてゐる。仕方がないから、しまひには取つつかまへて

否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにしてゐたが、さうすると、前足で格子を引搔いて、悲しいく血を吐きさうな啼聲を立てて後を慕ひ、姿が見えなくなつても啼き止まない。僕もそれは同じ思だ。泣出しさうな顔をして、ばたくと駈出し、聲の聞えない處まで来て、漸くほつとして並の步調になる。そしていつも心の中で、繰返し繰返しこんな事を思ふ。

「僕がゐないと淋しいもんだから、それであんなに後を追ふんだ、かはいさうだなあ。……僕あ學校なんぞへ行きたくないんだけれど、……行かないとお父さんがポチを棄てて了ふつて言ふもんだから、それでしやうがないから行くん

だけれども……。」

じゃんく〜と放課の鐘が鳴る。今まで静かだつた校舎内が俄かに騒がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して、あわたゞしくばつくと開く。と、その狭い口から、眞黒な塊がどつと廊下へ吐き出され、崩れてばらくの子供になり、我勝ちに玄關脇の昇降口を目掛けて駈出しながら、口に何だかわめく。只もう校舎をゆすつて、わあといふ聲の中に、無数の圓い顔が黙つて大きな口をあいて躍つてゐるやうで、何をわめいてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又ごたく〜と入り亂れ重なり

合つて、腋の下から才槌頭がひよつと出たり、反齒へ肱がぶつかつたり、靴の踵が生憎と霜焼の足を踏んだりして、上を下へとこね返したあげくに、わつと門外へ押出して、東西へちり／＼になる。

仲好し二人肩へ手を掛合つて行く前に、辨當箱をぼんと抛り上げては、ちよいと受けて行くいたづらものがある。其の隣は往來の石ころを蹴飛ばし／＼行く。誰だかあとで遊びに行くよ。」とわめく。「蝗を取りに行かないか。」といふ聲もする。「君、君。」と呼ぶ後で、誰かが誰かを罵る。「あ、痛い。」「何だい。」「わあい。」といふ聲ががや／＼と入れ違つて、友達が皆道草を喰つてゐる中を、僕一人は駈抜けるやうにして、脇

見もせずにつせと歸つて来る。

家の横町の角まで来て、くすぐつたいやうな心持になつて、そつと其の方角を見る。果してポチが門前へ迎へに出てる。僕を見つけるや否や、一散に飛んで来て飛附く、なめる。「何だか兄さん。」と言はれたやうな氣がする。若し本包と辨當箱と草履袋で兩手が塞がつてゐなかつたら、僕は此の時ポチをつかまへて、どうしたか分らないが、それがあるばかりに、どうする事も出来ない。據なく頭を撫でてやるだけで、不承して、また歩き出す。と、ポチも忽ち身をくねらせて、横飛にひよいと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて僕の顔を見て、おどけた眼附をする。追附くと、又逃げて、又

其の眼附をする。かうしてふざけながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で「只今。」といひながら内へ駈込んで、いきなり本包を其處に抛り出し、あわてて辨當箱をあけて、今日のお菜の残り——と稱して、實はたべたかつたのを我慢して半分残して來たのをポチにやる。それでも足りないで、おやつにお煎を三枚貰つたのを、せびつて五枚にして貰つて、二枚はたべて、三枚は又ポチにやる。

それから庭で一しきりポチと遊ぶと、母がきつと「おさらひをおし。」と言ふ。おさらひはいやだけれども、これをしないと、すぐポチを棄てると言はれるのがつらいので、澁々内へ入つて、型の如く本を取出し、少しばかりおんによこによ

ごとやる。それでおしまひだ。「餘り早いね。」と母が言ふのを、空耳つぶして、つと外へ出て、「ポチ來い、ポチ來い。」と呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。
これが僕の日課で、ポチでなければ夜も日も明けないのであつた。(平凡)

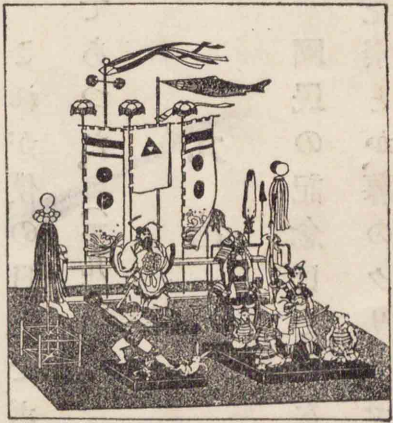
九 菖 蒲

島 崎 藤 村

島崎藤村
長野縣の人。名は春樹。小説家。詩人。
花祭
四月八日釋迦降誕の日花をたむける祭事。
クリスマス
Christmas. 十二月二十五日の基督降誕祭。

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、卯月八日の花祭とか、暮のクリスマスとかのやうな、宗教の意味のある祭日ではないまでも、一年に二度の節句の祝が、たゞく幼いもののためにあるのはうれしい。女の兒のためには三

月の桃の節句、男の兒のためには五月の菖蒲の節句があるのもうれしい。



菖蒲の節句の飾

あの三月の節句に取出されて、今にも合唱でも始めさうな雛や、古風な少年音楽隊のやうな五人ばやしのかはりに、五月の節句を祝ふためにあるものは、鍾馗と、鬼と、金時と、桃太

鍾馗
支那で疫鬼を驅るといふ神。

一、睦月
二、如月
三、彌生
四、卯月
五、皐月
六、水無月
七、文月
八、葉月
九、長月
十、神無月
十一、霜月
十二、師走

郎などの行列だ。五月の空に高くひるがへる鯉幟は、あたかも子供の國をそこに打建てたかのやうに見える。狭苦しい町の中にあつても、あちこち屋根の上に鯉幟を望むのは楽しい。鱗を描いた魚の形、長い尾、大きな眼、空にかゝる金と赤と黒とのあの色彩、動きを悦ぶ子供の心を樂しませるやうなあの飛揚。大人の心をも子供にかへすものは、あのはたくと風に鳴る鯉幟の音だ。五月の節句を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、軒にふく菖蒲までがお伽話の情調を誘ふのもなつかしい。五月の節句を迎へる頃は、何と言つても季節の感じが深

木蓮



満天星



大震災

大正十二年九月一日の關東地方の大震災。

い。桃櫻は過去り、椿や木蓮にも遅く、山吹と藤と満天星などの花の香氣を放つ五月のはじめは、一年のうちの最も楽しい季節の一つだ。遠い山々へはまだ雪の來る日があつて、雨でも降れば裕ゆたかでは寒いこともあるやうなこの大震災後の都會へ、生氣をそゞぎ入れるのも、町々に見る新しい緑だ。私達の周圍は最早若葉の世界だ。この好い時候に、楽しい菖蒲の節句がやつて來る。

桃の花が少女にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形もいい。爽かてみづくしい葉の色も好まし。あれを軒に

かけるといふことも、優しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯があつて、あの香氣が人を酔はせるばかりでなく、私達の身をも心をも温めてくれるのもうれしい。青々とした菖蒲の浮いて居る中をかきわけて、湯槽ゆなに浸るのも楽しみだし、あの葉が私達の肌などへべたりと附いた時の心持も悪くない。

「奥の細道」に曰く、

「名取川を渡りて仙臺に入る。あやめふく日なり。旅宿をもとめて四五日逗留す。こゝに畫工加右衛門といふものあり、いさゝか心あるものと聞きて知る人になる。この

奥の細道

奥の細道
松尾芭蕉が奥羽を
旅した時かいた旅
日記。
名取川
仙臺市の南方を流
れてゐる川。

鹽釜
宮城縣(陸前)宮城
郡鹽釜町。

もの、年頃さだかならぬ名所を考へ置き待ればとて、一日案内す。……なほ松島、鹽釜のところへ、畫にかきて贈る。且、紺の染緒つけたる草鞋二足はなむけ餞す。さればこそ風流のしれ

もの、爰に至りてその實をあらはす。

五月の節句といふと、この道の記の一節が私の胸へ浮んで来る。

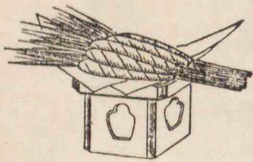
あやめ草足に結ばん草鞋の緒といふ私の好きな句は、その時に残した芭蕉の旅情だ。あの道の記の文句の中に、紺の染緒をつけた草鞋二足を餞別に贈られたとあるのは、折柄のあ



(良曾と蕉芭) 旅の道細の奥

あやめ草
菖蒲。

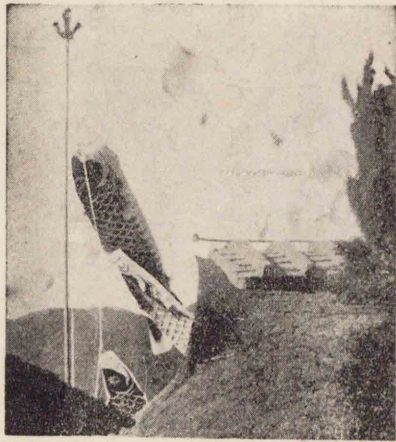
ちまき



やめの花の色から来た仙臺の畫家の思ひ付であつたらう。その道に精しい人の考證によると、奥の細道の旅は前後百六十日、およそ六百里の行程とある。そんな長途の雨風にままれ、草臥れて旅宿に辿り着いた頃に、あやめふく季節にめぐりあつたといふ昔の人の旅の心の深さを、私達の胸に描いて見るのも懐かしい。子供の友達であつたやうな昔の人を、この祝の日に思ひ出して見るのもなつかしい。

粽ちまきのかをりは幼い日のかをりだ。粽ばかりは鄙びたところころに造られるものほど好い。あの細長い粽の葉の巻きつけてあるのを解いて、青い色に蒸されたかをりを嗅いだ

私の家
東京市麻布區飯倉
片町。作者の家は
俗に狎穴といつて
低い所にあつた。



鯉のぼり

子供の頃の心持は、今だに忘れられない。粽の外に、柏餅、赤の御飯などと考へて來ると、五月の節句を祝ふもので、何がなしになつかしい思を誘はないものはない。私達の少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つて居るやうな氣もする。

この節句を祝ふ爲に、私の家の近所にも大きな幟竿が立つた。矢の形をした風車を竿の先につけたやつで、青葉に埋められた谷底のやうな私の家の前あたりからは、高く見上げるやうな位置にある。きの

ふの夕方、私はそこいらを歩き廻りに行つて、坂の下まで歸つて來ると、隣家の男の兒がお婆さんの背中につかまりながら、ちつと岡の上の風車の動くのを見つめて居るのに逢つた。私は、またその男の兒の顔を見まもりながら、しばらくそこに立つて居た。漸く數へ歳の二つにしかならないやうな幼い子供にも、そんなに眼に映るものがあるといふことは、ある深い印象を私に與へた。(藤村讀本)

一〇 心の修行

村井 弦 齋

伏見天皇の御代に、日本全國から刀工十八人を選び出して、各、一口づつの刀を徴されたことがあつた。その中で第

村井弦齋
名は寛、東京の人。
小説家。昭和二年
歿、年六十五。

伏見天皇
第九十二代。

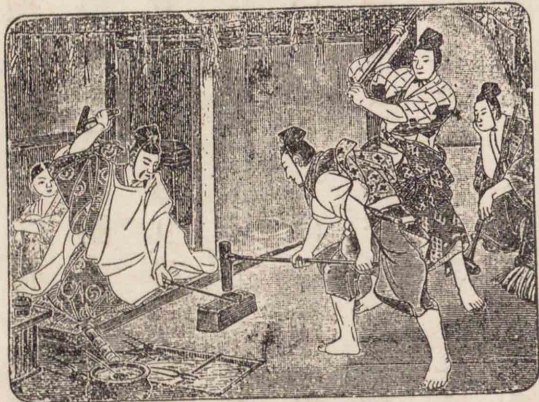
松倉
下新川郡松倉村。
郷義弘
右馬允と稱した。
建武頃の人。

正宗
相模國鎌倉町雪の
下に住し五郎入道
と號した。正應嘉
暦年間の人。

一の選に當つた刀が天皇の御守になるといふのだから、諸國の刀工は皆畢生の腕を揮つてその刀を鍛へあげた。當時日本一の刀鍛冶と、人も許し自らも誇つてゐたのは、越中の國松倉の人、郷義弘である。義弘は、當時刀打つ業では恐らく自分の右に出づる者はあるまい、自分こそ必ず第一の選にあづかるに相違ないと待ちかまへてゐたところ、思の外に、相州の正宗が第一といふ事に定められた。義弘はこれを聞いて、彼正宗は刀を打つよりも世わたりの方が上手で、賄賂でも遣つてこの僥倖を得たのであらう。よし、それならば、これから相州に赴いて、一刀に斬つて棄てようと、決死の勢で、越中の國からはるゝ相州鎌倉へ出かけて

往つた。

義弘は正宗の家に着くと、丁度仕事場には鎚の音が聞え



刀鍛冶

たので、まづその窓から中の様子を覗つてゐたが、忽ち何を悟つたのか、今までの勢どこへやら、しをしをとして玄關へ廻り、刺を通じて正宗に面會を求めた。正宗は有名な義弘と聞いて、すぐに迎へ入れた。義弘は初對面の挨拶を慇懃に述べて、さて正宗殿、何を隠さう、自分は今日貴殿と腕くらべして、様子によつたら貴殿

を討果す覺悟で參つたところが、今よそながら貴殿の仕事振を拜見して、自分の遠く及ばない事を悟りましたから、懺悔の爲にお話し申す。一體自分は酒好きで、仕事場に酒を置く事があり、暑い時には兩肌脱いで刀を打つ事もありま
す。今貴殿の刀を打たれる様を見ると、我が身のはしたない心掛けとは雲泥の相違、仕事場には神々しく注連を張り、隅々まで祓ひ淨め、貴殿も弟子も折目正しい袴をつけて、威儀堂々と鎚を取られる。その眼は少しも外を視ず、その心は少しも外に散らず、身も魂もその刀にのりうつるかと思ふばかり。それ程の丹誠を籠めてこそ、天下の名刀も打ち得られる事と感じ入りました。今まで腕一つで刀打つも

のと心得てゐたのは愧かしい。どうか今から貴殿の弟子として、心の修行をさせて下され。」と、懇ろに頼んだ。正宗は謙遜して一旦は斷つたけれども、義弘の熱心已み難いのを見て、遂に弟子にしたといふ事である。

函 人

中 村 栗 園

中村栗園
名は和。豊前中津
の儒者。明治十四
年歿。年七十六。

某侯函人をして鐵甲を作らしむ。既に成る。之を試みんご欲す。函人曰く「臣能く身を以て之に當らん。」と。乃ち其の甲を擲いて立つ。侯善く射る者に命じ、強弓勁矢利鐵を以て之を射しむ。胸に中る。鏗然として、矢躍つて入らず。侯曰く「善し、吾既に其の前を試みたり。未だ其の後の何如を知らず。」と。將に

其の背を試みんとす。函人甲を釋きて跪いて曰く、「臣未だ怯者の甲を作るに慣れず、請ふ辭せん。」と。侯曰く、「吾過てり」と。之を賞するに金を以てせり。(日本智囊)

一一 鮎のかげ

室生犀星

室生犀星
名は照道。金澤の人。詩人。小説家。

背なかにほくろのある鮎が
日のさす靜かな瀬のうちに泳ぎ澄んでゐる
幾列にもなつて
優しいからだを光らしてゐる
その影は白い砂地にかげ繪のやうに

大きくなつたり小さくなつたりして
時にはぼやけたりする
水のかげまで玉をつゝつて
砂底へ落ちてゆく
ちひさな物音にさへ
花のやうに驚いては散つて
またあつまる鮎
すらりと群を抜いて大きな鮎が
ときどき群を統べてゐるのか
すこし瀬がしらへ出たり
ほこらしく高く泳いで水面へ

ばかりとはねくり返る
 しんとした波紋がする
 あとは土手の上の若葉の匂がするばかり (室生犀星詩集)

一二 水郷めぐり 高濱虚子

高濱虚子
 名は清。松山の人。
 俳人。

この間、父さんは霞が浦から鹿島香取へかけて旅行をした。そのお話をして聞かさうか。

上野
 東京市上野驛。
 土浦
 茨城縣新治郡。霞
 浦にのぞむ都邑。

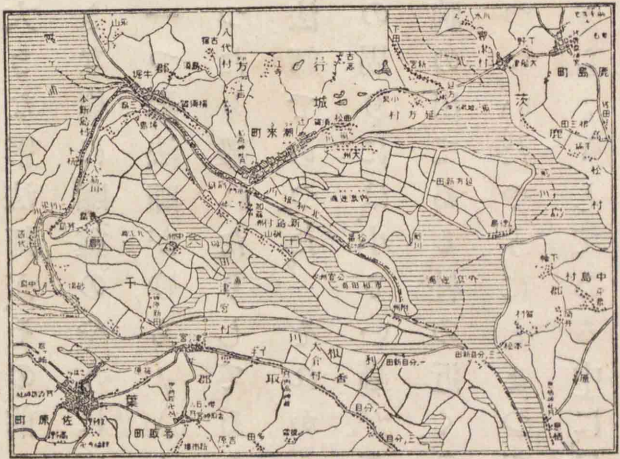
上野を出る時がおそかつたから、土浦に着いた時分はもう燈火がついてゐた。櫻井といふ宿屋に泊つた。土浦といふところは、九萬石の城下であつたさうだが、夜見たところでは淋しいところであつた。それでも電燈はついてゐ



— 郷 水 —

た。父さんが宿屋の二階の廊下に立つてゐると、父さんの大きな影法師が、その前の廣い庭に刈込んである一つの大きな樹に幽霊のやうにぼんやり映つてゐた。と思ふとも一つ影法師がゆら／＼とその樹に映つて、父さんのと重なつたり離れたりしてゐた。これは下の廊下にある人の影法師であつた。それから、廊下の曲り角についてゐる電燈の周りには、小さい蟲が澤山飛んでゐたが、丁度その電燈の腕の出てる柱の近くの壁に、一つの黒い蛾が、べたりとくつついたやうにとまつてゐて、他の澤山の蟲が埃のやうにきら／＼してゐる中に、目だつて氣味わるくそれが静まつかへつてゐた。父さんはよく旅をするが、それでも旅とい

兩國橋
東京市日本橋區と
本所區との間、隅
田川上に架する橋。



ふものは何となく淋しいものだ。

つて敷いて坐るのだ。船の乗合といふものは、一體に面白

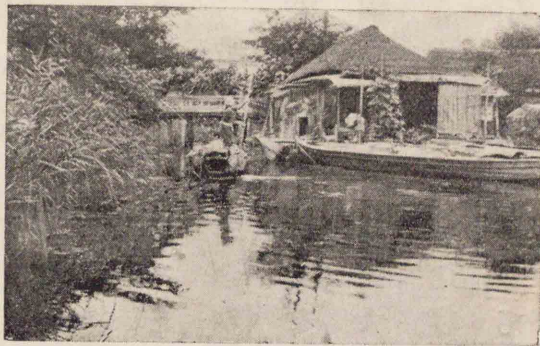
あくる日、こゝから船に乗つたが、船といふのは、兩國橋あたりに行つて見ると、お前らも見るとやうな外車そとくるまの川蒸氣だ。川蒸氣は、立つと頭がつかへるやうな低い天井の下に、鐵の火鉢が一つ置いてあつて、室の隅つこに積んである座布團を、めい／＼が一つつつ勝手にと

いもので、今まで何も知らなかつた人が、急に知りあひになつて、一緒に乗つてゐる間話し合ひ、船が着いて上つてしまふと、もうそれつきり別れてしまつて一生逢はないのだから、なつかしいやうな淋しいやうな心持のするものだ。

霞が浦
茨城縣の東南隅にある。利根川に會して鹿島灘に入る。
麻生
茨城縣行方郡霞が浦の一要港。

船は霞が浦の兩岸の漁村の主な處にかはりばんこに寄港して行くので、なか／＼時間がとれる。浦はだん／＼水幅が廣くなり、一大湖の感じがしてゐたのが、麻生を過ぎたころから、眞菰の叢生した平坦な洲と、やゝ小高い陸地とが左右からせまつて來て、そこはもう小さい川をなしてゐた。窓から首をつき出して行手を眺めると、その掘割のやうな川には、澤山の和船が、それ／＼荷物を積んでぎし／＼とつ

牛堀
茨城縣行方郡。霞
が浦の咽喉を扼す
る要津。
潮來
茨城縣行方郡。北
利根川の畔。



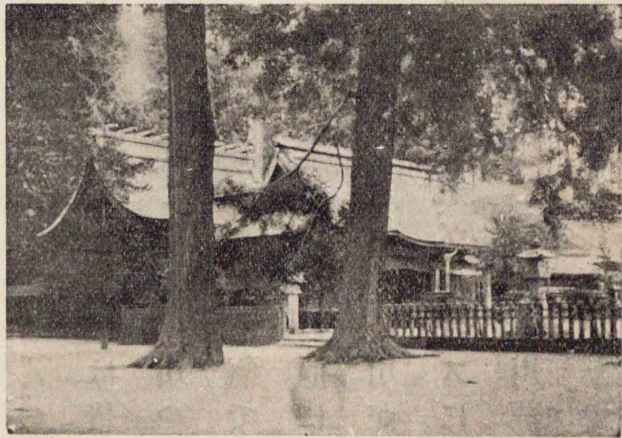
潮 來 十 二 橋

まつてゐた。そこへ殆ど川幅一杯ぐらゐと思はれる川蒸
氣が進んで行くのであるから、どうなることかと思つてゐ
たら、行手の和船どもは、船頭が肩に
あてた竹棹を弓のやうにしわらし
て、何れも力一杯に陸の方に片よせ
たので、蒸氣は速力をゆるめながら、
そのあけてくれた水道の方に舵を
轉じて進んで行つた。
そのうち牛堀といふ處を過ぎて
潮來といふ處に着いた、父さんは
そこに泊つた。潮來は、伊太利のヴェニスヴェニスの都を引合に出

すのは仰山かも知れぬが、兎に角水郷といつた様な感じの
する處で、丁度父さんの着いたのは六時過の日暮であつた
が、田から歸る百姓は皆舟に乗つて、男や女が自由自在に櫓
を漕いで、こちらの川や向うの川を三々五々と通るのであ
つた。さつき川蒸氣で通つた處は、此邊で一番廣い水であ
つたのだが、尙その他に澤山の川があつて、縦横に田の間を
流れてゐる。その川が往來の代りになつて、舟が車の代り
になる點が、ヴェニスに似てゐると云へば云へるのである。
翌朝又ここから川蒸氣に乗つて鹿島明神に參詣した。
それは一時間ばかりで大船津といふ處に着いて、そこから
俵で半道ばかりを行つて明神の社に着いたのであつた。

鹿島神宮
茨城県鹿島郡鹿島町に鎮座、官幣大社。
香取神宮
千葉県香取郡佐原町に鎮座、官幣大社。
息栖神社
同郡中島村息栖に鎮座。

鹿島香取息栖は、これを三社と稱へて、我國でも最も古い

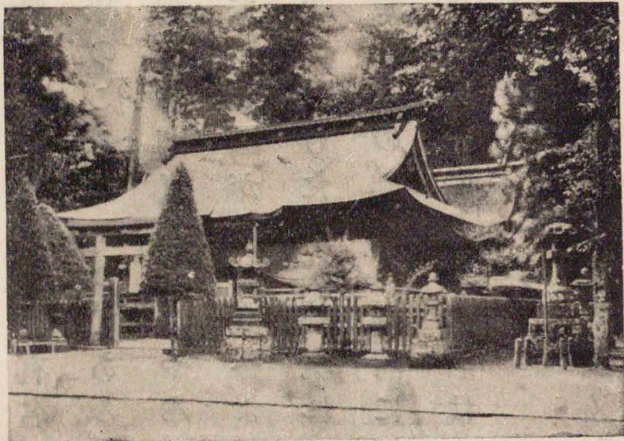


香取神宮

いふやうなものが、この神様たちであつたのだ。で、鹿島に

藤田東湖
名は彪。水戸藩士。幕末の志士。安政二年(一八五〇)歿、年五十。

神しい感じに打たれる。



鹿島神社

は武甕槌命、香取には經津主命が祀つてあり、息栖にはこのお二人と負けず劣らずに戦功のあつた神様たちが祀つてある。昔からこの鹿島に參詣したのでは、大分有名な文章もあるが、中でも芭蕉の鹿島詣などは有名である。

鹿島神宮は小高い丘の上の鬱蒼たる森の中にあつて、社殿も莊嚴な建物が古びてゐて神お前等は藤田東湖といふ有名な

維新前の人を知つてゐるだらう。その東湖先生がこの御社に參つて作つた有名な詩があるが、その中にかういふ意味のことが云つてある。「世の中がどんなに變つても、この神様の御氣象はちやんといつまでも傳はつてゐる。そのため我國が時々衰へようとするやうな時代があると、御氣象を受けた英雄が現れて來て、すぐそれを取りかへす。」と。實際この神様の御前に額づく、そんなやうな心持がする。東郷大將や乃木大將はやはりその御氣象を受けた人々といへるであらう。

父さんはそれから又もとの大船津に出て、再び川蒸氣に乗つて霞が浦に浮かんだのである。川蒸氣は前の航路を

横利根川
霞が浦と利根川と
の間の水路。
大利根
利根川の本流。
佐原
千葉縣香取郡佐原
町。

逆もどりして、昨夜泊つた潮來の前をも素通りして、牛堀から左に曲り、横利根川を通つて、大利根に出で、その佐原といふ町に船がかりして、その夜は船も佐原に泊り、父さんも山本といふ宿に泊つたのであつた。

この時の船の中で、頭の中にしつかりと残つてゐる事は、もう船が横利根川に這入つた時分は全く暮れてしまつて、父さんは船窓の硝子に鼻をすりつけるやうにして、外の景色を眺めてゐたのであつたが、その時ぼうと赤い光が一行手に見えたと思ふと、段々それが近づいて來て、大きな和船がすうと傍を通りすぎた。その時であつた。最前からちら／＼と螢の飛ぶのが目についてゐたのであつたが、今

大きな和船の通り過ぎた向うの岸を見ると、そこには一本の大きな柳が眞菰の中に突き出てゐて、絲のやうな澤山の枝を水の上に垂れてゐる、その下の方が妙に明るいと思つて見ると、その柳の下から眞菰の中にかけて、螢籠を置いたかと思ふやうに澤山の螢がゐた。さうして柳の下に小さい一艘の小舟が、半分岸に引上げるやうにして置いてあつたのも、その螢の光でよく見えた。その後も水の上をすいと飛んだかと思ふと、忽ち又眞黒の暗になつてしまふといふやうな螢は度々見たが、こんな花々しい、併しながら又何となく物凄いやうな光景は、前後もう二度とは見なかつた。朝、眼をさまして見ると雨が降つてゐた。俵を命じて早

銚子
伊勢縣銚子市
利根川口の港湾

朝に香取神宮に参拜した。こゝのお宮もこんもりとした杉の中にあつて、お社も立派であつたが、鹿島神宮に比べて東京から参拜に便利なためもあらう、一體が都近い心持がして、もの寂びたところが少かつた。

宿に歸るとまだ八時前であつた。船に乗つて銚子へ下ることにして、十時の出船を待合はすまでの一時間半ばかりの間、ちつと耳を澄ますと、雨垂の音が聞える。障子をあけると、どこの港町にもよく見るやうに、中央には川が流れてゐる。それを夾んで二筋の道があつて、その兩側に人家がある。父さんの泊つてゐる宿もその中の一軒であるが、川を隔てて向うの家並の中にも何とかいふ宿屋が一

軒あつた。川の兩岸を通る人や車は極めて稀だつた。一軒の家から鍋や釜を持つた一人の女が、頭に手拭をかぶつたままで、雨にぬれながら川岸の石段を下りて、その川の水で鍋や釜を洗ふのが、目立つて見えるほど人影は少かつた。けれどもその代り兩岸近くもやつてゐる苦を葺いた船は、氣持のいゝ程ぎつしりと詰つてゐて、その中に僅かに空いてゐる水道を、絶えず櫓を漕ぐ船や、棹をとる船が上つたり下つたりしてゐるのが、いかにも港町らしい一種の心持を傳へる。それらをちつと見てゐるといふことも、その場合、父さんにとつて堪へがたい淋しさであつた。

十時前になると、川蒸氣は二三度汽笛を鳴らした。(虚子文集)

一三 鳥居強右衛門

湯淺常山

天正三年、勝頼、奥平九八郎信昌が三州長篠の城を圍み攻む。東照宮援兵を織田家に乞はせ給ひ、後卷の謀をめぐらし給ふ處に、城中糧米既に盡きんとせしかば、此の旨を告げ奉らんため、鳥居強右衛門勝商に命じて、密かに城を出す。鳥居、逃れ出づる事を得ば、向うの雁峯がんぼが嶺に煙をあぐべし。三日を過ぎて、又かの山に煙を兩度あげなば、後卷なしと知り給ふべし。三度あげなば、後卷あることを知り給へ。と約しければ、信昌、鈴木金七郎を鳥居にそへて遣はす。五月十四日の夜、城の西なる山の岩根をつたひて川に入

鳥居強右衛門
三河の人。徳川家康の臣。奥平信昌に仕へた。天正三年(三三五)節に死す。年三十六。
湯淺常山
名は元禎。儒者。岡山の藩士。天明元年(四一)歿。年七十四。
勝頼
武田勝頼。奥平九八郎初め今川氏に屬したが、天正元年父貞能と共に家康に歸して長篠城を賜はつた。
長篠
愛知縣(三河)南設楽郡長篠村。
東照宮
徳川家康の諡。
織田家
織田信長。
雁峯が嶺
長篠城の西四軒。

廣瀬
長篠城の南二軒
十五日
天正三年五月
岡崎
徳川家康の居城。

る。寄手素より大野川瀧川の水底に繩を張りて、鳴子を懸けたれば、通るべきやうもなし。二人は水練の達者にて、川の浅瀬はよく知りつ。小脇差を抜きて、川底を潜り、繩を切つて通りしかば、からくくと鳴りけるを、番の兵ども怪しみけるに、其の中に一人、五月雨には、かゝる川をば、鱸の通るならん。」と言ひければ、さて止みぬ。二人は早瀧の下廣瀬といふところに上り、雁峯が嶺にて煙をあげ、十五日に岡崎に参りて、しかくくの由を申すところに、信長其の日岡崎に着陣せらる。鳥居は、信昌なほ心許なくや候ふらん。忍びて城に入ることを得ば、はや後卷候ふべきこと、審かに申さん。」とて引返す。鈴木は、信昌が父、美作守貞能に告ぐべし。」とて、鳥

篠原
長篠城の西南瀧川
を隔て、相對する
處。

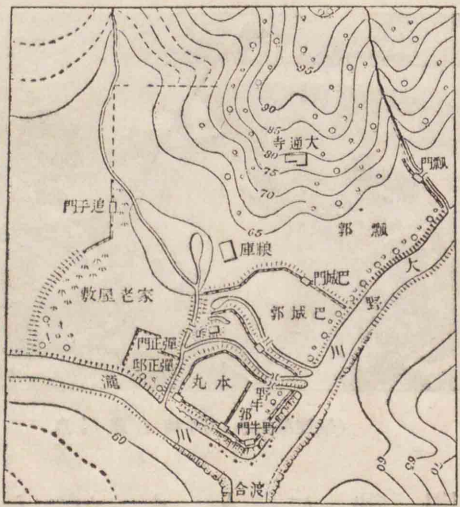
穴山
穴山梅雪、信玄の
姉の子。

信綱
信玄の弟。



居に別れけり。

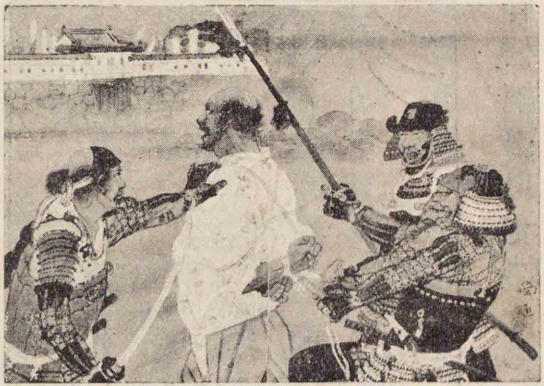
鳥居、雁峯が嶺に上り、合圖の煙三度あげて後、篠原といふ



長篠城要圖

處に往き、忍び入らんとするに、柵嚴重にして砂をまき、出入の人の足跡をあらためしかば、なかく入るべき様なくてためらひけるを、穴山の手の者見つけて、怪しみて遂に搦め取りけり。勝頼、逍遙に答へしかば、勝頼、鳥居を呼んで、汝が命を助くべし。汝、城

一宮
愛知縣(三河)寶飯郡富村にある。長篠の西南六軒餘。
野田
愛知縣(三河)南設樂郡千秋村にある。長篠の西南九軒餘。



(筆達榮山小) 門衛右強居鳥

際に往きて、『信長は上方の軍にて、此の城の後卷思ひも寄らず。』といはゞ、城兵降参すべし。さらば汝に厚く賞せん。』といはれしかば、鳥居乃ち「心得候。」とて、城門近く至り、「後卷とて、信長御父子、岡崎まで昨日旗を出され、先陣は一宮に陣せり。徳川殿父子、野田まで御馬を出されたり。此の城、運を開かんこと掌の中にあり。」といひければ、甲州の者ども大いに驚き、鳥居を引連れて、勝頼にかくと申せば、勝頼大いに怒つて、城に向け、礮にして殺しけり。

作手
愛知縣(三河)南設樂郡。長篠城の西方八軒。

大槻磐溪
名は清崇。仙臺の人。明治十一年歿。年七十八。
佐久郡
長野縣(信濃)の郡名。

長篠にて勝頼敗北して後、信長を始め、鳥居が無雙の忠なることを感じ、作手の甘泉寺に懇ろに葬られけり。(常山紀談)

信玄の二士

大槻 磐 溪

武田信玄の村上義清を佐久郡に攻むるや、兩陣既に戦を交へ、矢丸雨の如し。皆竹牌を以て自ら蔽ひ、環列して牆を爲す。俄かにして信玄其の陣を分ちて兩隊を爲さん欲し、三井米田をして、遙かに令を別將、飯富板垣の二氏に傳へしむ。二使命を受けて出づ。米田曰く、「牌外は路危し。請ふ牌内より行かん。」三井曰く、「苟も矢丸を畏れば、何ぞ勇者を用ひん。我は則ち牌外より行かん。」出づれば、則ち銃丸亂下し、屢中る所を爲らん。

し、僅かに百死を免れ、以て達するを得たり。則ち面色灰の如く口噤して言ふ能はず。

米田既に令を二將に傳へ、笑ひて三井に謂ひて曰く、「請ふ歸路を牌外に取らん。」と。三井曰く、「一たびすら且之を悔ゆ。豈再びす可けんや。」と。米田曰く、「前に子と俱にせざりし所以の者は、特主命の達せざるを恐れしのみ、今使事既に畢る。吾何を畏れて牌外よりせざらんや。」と。既に反りて復命し、意氣從容、辭令故の如し。三井乃ち大いに慚服す。(近古史談)

一四 人間の大小

薄田 泣董

世界大戦で、聯合軍側の大立物は、何といつても英國首相ロイド、ジョージ氏を第一に推さねばならない。其の大立

薄田泣董
名は淳介。岡山縣の人。詩人。隨筆家。大阪毎日新聞社員。
ロイド、ジョージ
西曆一九二二年十月首相辭職。

ウェールズ
英國の州の名。



ジョージロイド

物のロイド、ジョージ氏が、ウェールズ生れの、身長せの低い、やつと五尺そこゝの小男だとは知らない人が多い。戦争中の或年の春だつた。ロイド、ジョージ氏が南ウェールズの或都市へ演説に出かけたことがあつた。無論戦争に關する演説で、自惚うぶ好きな英國人が、首相の口から直接ドイツ文明が安物のぼろつきれであることを

聽くための催しだつた。其の演説會の司會者といふのは、大のロイド、ジョージ崇拜者で、此の政治家の試みた演説は、どんな詰らないもので

も、悉く新聞を切抜いて、手文庫に仕舞つておくといふ風の男だつた。だが、これまで一度も、此の自分の崇拜する人に出會つたことが無かつたので、其の日は朝から胸をわくわくさせて待つてゐた。會場には聴衆がぎつしり詰つてゐた。當日の演説家を案内して會場へ入つて來た身長の高い司會者は、まづ起つて、此の名高い政治家を聴衆に紹介したが、其の中に次のやうな言葉があつた。

「私は不斷から此の偉人を崇拜してゐましたが、正直に申しますと、體のもつと大きい、見かけの堂々たるお方だとばかり思つてゐましたのに、今日初めてお目にかゝつて、實は驚いたやうな始末で。」

次いで起つたロイド、ジョージ氏は、小さいが、しかし胡桃のやうな、かつちりした體を演壇に運んだ。

「唯今承りますと、今日の司會者は、私にお會ひになつて、ひどく失望されたやうな御様子で、まことにお氣の毒に堪へません。」

と、首相は背^の高^はな司會者の方へ皮肉な眼付を投げた。

「だが、今承つて始めて氣付いたのは、私どもの北ウエールズと當地とでは、人間を測る標準が違つてゐるといふことです。南ウエールズでは、人間を頤^{から}下^のの大きさを測るらしいが、私どもの北ウエールズでは、其の反對に、頤^{から}上^のの大きさを定めることになつてゐます。」

かういつて、ロイド、ジョージ氏は自慢の大きな頭を肩の上で振つて見せた。聴衆は譯もなく嬉しがつて、頤から下の馬鹿に大きい體を揺ぶつて喝采した。(新茶話)

一五 親ごころ

一 酒勾なる二兒へ

毎々手紙くれてうれしい。伊澤先生が二十日まで居るがよからうとの御手紙故、そのつもりにて大いに勉強すべし。十五六日頃一寸行くかも知れぬが、二十日には必ず迎へに行く。土産物はその時ゆつくり買ひてよかるべし。

大町桂月
名は芳衛。文章家。
大正十四年歿、年
五十七。
酒勾
神奈川縣小田原の
東北。
伊澤先生
名は修二。教育家。
貴族院議員。晩年
樂石社を起し、吃音
矯正の事に従ふ。
大正六年歿、年六
十七。



大町桂月

先生よりの御手紙に、決して父の言語を眞似してはならぬ。といふことをお前達に誓はせるとの事ゆゑ、お前もそのつもりにて、先生の言はるゝ事を承るべし。

この父の吃音の眞似させたくなきは言ふまでもなし。その外缺點もあり、悪癖もあり。世上どんな人でも長所と短所とあるものなり。然るに、人は他人の短所には氣がつき易けれど、他人の長所には氣がつきにくきものなり。この父の短所多けれど、男らしいといふ氣象は大いにもつて居るなり。これはお前達が年長するにつれて

分つてくる。文章も決して人後に落ちぬなり。この二點は大いに眞似して可なり。「餓ゑては食をえらばず」と古の人が言へり。お前達は肴が嫌ひなるが、餓ゑたら必ず食へる。嫌ひでも食つてをれば終には好きになる。何かの罐詰でも送ることとはわけもないが、それでは却つてお前達のためにならぬ。長じて兵隊に出たり、旅行したり、人の家に行つたり、その他いろ／＼の時に困る。人は食物に好き嫌ひあるが如く、萬事氣隨氣儘になり易し。氣隨氣儘では世は渡られぬ。何事も辛抱が大切なり。この儀よく／＼心に銘すべし。今日は父も母も忙しくて郵

便局へ行けぬから、爲替は明日あたりおくる。(桂月全集)

二 米澤なる愛兒へ

五十嵐 力

五十嵐力
米澤の人。國文學
者。文學博士。早
稻田大學教授。

度々手紙をくれてうれしい。お前方が立つてから家の中はピンカラリン、まるで大風の吹いたあとの様で、鼠に引かれさうな淋しい日を送つてゐる。あの小坊主(お前の事)を淋しい時だけ取りよせて傍において、やかましくて困る時は、電氣仕掛で國へ送つてやれたらよからうなど云つては、生きた人間が、まさかさうもなるまいなんて、馬鹿話をする事も度々ある。親類まはりや、山登りや、温泉あるきや、水泳や、魚釣り

で大分忙しい様子、結構だ、結構だ。好い空気を吸つて、うんと遊んで、これから一年の間勉強する元気を養つて來るがよい。但しその間に朝一二時間の數學英語

その他のお稽古、これは是非ともやらねばなりませんぞ。



カ寺の様子を見て、歸つてから報告なさい。先祖様のお墓、お祖

父様、お祖母様の御墓には、取りわけ立派に御辭儀をしていらつしやい。それから謙信公の上杉神社、鷹山公の松岬神社へも是非參詣して、尙お婆様達から謙信公

謙信公
上杉謙信
上杉神社
別格官幣社。米澤
舊城の中央にあ
る。
鷹山公
上杉治憲、田羽國
米澤城主、文政五
年(一八一三)歿、年七
十七。

鷹山公のお話をよく伺つていらつしやい。それから若し暇があつたら、御廟山に參詣して、上杉家の御廟所の左手の前に、今から百數十年前のお祖父様——鷹山公に御奉公して家の先祖様達の中で一番立身したお方——の献納なすつた石の燈籠が立つて居り、それにその御祖父様の名と献納なすつた年月とが刻んである。それを見て、わが家は米澤藩の中でも卑しい家柄ではなかつた、吾々も先祖様達の御顔をよこしてはならぬといふ事をよく考へていらつしやい。明日は八月だ。もう二週間ばかりでお前に逢へると思ふと、中旬が待遠でならぬ。達者で歸つて來るん

巢鴨
東京市豊島區巢鴨
町一六一六は住
宅の番地。

だぞ。よいか、病氣をせず、怪我をせずに、巢鴨の一六一六に歸つて、二の間の蚊帳の中へお母様達と一しよに寝て、そして井戸に冷したサイダーを飲むんだぞ。

あとは明日、左様ならく、
(わが書簡)

宮下正美
長野縣の人。教育

母雞の愛

宮下正美

このほど、埼玉縣で教師をしてゐる友人から、實に驚くべく、珍しい、いたましい、哀れな、また涙ぐましい一つの出來事を書送つて來ました。次に友人の言葉をそのまゝに書記して、諸君に讀んでいたゞかうと思ひます。

長い旱天がつゞいて、今年の夏は二十日間といふものは一粒

の雨もありませんでした。この頃になると、毎日のやうにやつて來る夕立も、山峽から遠雷のかすかな響を傳へるばかりで、畠も、田圃も、道も、林も、すっかり乾ききつて、小川の水さへ殆ど流れておませんでした。「こんな時に、火事でもあつてはたまらないな。」みんなが考へて用心をしてゐましたが、不幸にもそれが實際となつて、友人の隣家のお百姓さんの納屋から火を出しました。「火事だ。火事だ。」騒ぎ出したころには、火はまたゞく間に納屋を包んで、手のつけやうがありませんでした。
幸なここには、主家は餘程はなれてゐましたので、焼けませんでした。したが、納屋は、屋臺骨を残して丸焼で、その中に入れておいた雞は一羽も救ひ出すことが出來ませんでした。火の燃えてゐる最中、中から雞の聲も、雛の聲も、かすかに聞くことが出來たの

ですけれど、火の廻りが早くて、見殺しにするほかはなかつたのです。

こにかく、焼跡を掘りおこして見ました。かはいさうに、あわて騒いだと見えて、十幾羽の雞が、或は三四羽一つにかたまり、或は一羽づつ放ればなれに、何れも黒こげになつて死んでゐました。「氣の毒なことをした。熱かつたらうに。」と、人一倍、雞を可愛がつてゐたお百姓さんは、涙を一ばいためながら、しきりに木や灰をかきわけてゐます。ふと、少し土のくぼんだ所に、やはり一羽の雞が眞黒になつて死んでゐました。「咄嗟の場合に、こんな凹地まで見つけて、何と助からうと考へた心がいぢらしい。」と、そんな事を考へながら、主人が、何の氣もなくその雞を持上げます。突然、その腹の下から、「ピヨ、ピヨ、ピヨ。」と、鳴きながら、雞が三羽

飛出しました。

「あッ。」と、いふなり、見てゐたものは、みんなその場に釘づけにされてしまひました。何と、いふ意外なことでせう。主人は、ごもすれば聲の出さうになる口をしつかり結んで、早速、雞を抱上げました。大粒の涙が頬を傳つてゐました。

母雞が、雞を凹地につれて來て、しつかり腹の下におしかくしたのでせう。あの恐ろしい焔と熱とが、母雞の翼と毛とを焼きつくして、やがてその生命までも奪つていつても、そこに隠された雞の體には、火傷一つ負はさないやうに、ちつとこらへて、身動き一つしなかつたものと見えます。あゝ、この母雞の犠牲を、私どもは何と考へてよいでせうか。

三羽の雞が、新しい空氣を喜ぶかのやうに、「ピヨ、ピヨ、ピヨ。」と、鳴

いてゐるのを見るに、一同は胸がつかまつて、こみ上げてくる涙をおさへることが出来なかつたこと申します。

何百何千といふ頁にわたつて、お母さんの愛の尊いことや、親の心の何ものにも代へ難いことを讀んだり聞かされたりしましたが、この眞剣な涙ぐましい母鷄の犠牲の死の事實の方が、このくらゐ自分を感動させ、考へさせ、故郷の母のことを思ひ出させたかわかりません。と、友人の手紙に書いてありました。

(旅で見た動物の話)

前田晃
山梨縣の人。文學者。

一六 手紙の懐かしさ

前田 晃

手紙といふもの位あはれに懐かしいものはない。

獨りで寂しくてたまらずにゐるやうな時は勿論のこと、

さうでない時でさへも、「郵便！」といふ高らかな配達夫の聲を玄關の方に當つて聞きでもすると、「幸福」が舞込みでもしたやうな嬉しい心持のするものである。「何處から來たのだらう。」誰から來たのだらう。「かういふ考が忽ち浮んで來て、その郵便物を手にするまでの楽しさといつたらない。けれどもいよくそれを手に取つて、封を切つて見る段になると、その手紙の種類によつて、喜にも度合が生じてくる。最も嬉しく思はれるのは、やはり何といつても、親友の蔽ひ隠しのない胸を開いたやうな手紙である。暫く逢はなかつた場合なら勿論のこと、さまででない時でさへも、心と心と相許した親友同志が、向ひ合つて心の中を語り合ふ

やうな手紙に接すると、俄かに自分の胸も開けて来て、先刻までの寂しさなどは何時の間にか雲散霧消してしまふ。遠く故郷を離れてゐる者にとつては、生家からの消息もまた懐かしいものの一つである。「この頃の氣候はどうも不順であるが、其許には別段の障りもないか。こちらは一家打揃つて無事にくらしてゐる。天候が定らぬので作物の出来榮はどうかと思つてゐたが、先づこの分ならば、この先天氣さへつゞけば豊年だらうと思ふ。その邊には何の懸念もなく、其許は専心に勉強するがよい。」かういふ手紙は、大抵きまつた文句を並べることが多いものだが、それでも、それを書いた人が年とつた父親であるとか、優しい

母親であるとか、兄であるとかで、自分に親しい筆蹟を見ただけでも、様々なことが故郷といふ觀念と共に聯想されて來て、他人の手紙などに比すれば、凡そ幾倍の興味があるかも知れない。

ふだんならばうるさく思ふやうな用事の手紙でさへも、時に依ると、また久しく待たれるもののやうに嬉しく讀まれることがある。例へば、思ひ疲れてたゞ茫然としてゐる時などは、さういふ手紙に接したために、自分の立場や周圍を改めて明かに見やることまで出來て、心の緊張を覚え、世間に處して行く上に於ける力と用意とを、更に新にするといふやうなこともある。一體人の頭といふものは、時折何

等かの刺戟を受けぬと、やゝもすれば次第に腐つて行つて、終には、因循になつたり姑息になつたりしたがるものだ。手紙を受取つた時のかういふ純な喜を思ふ毎に、私はまたこちらからも胸を開いた、真情の流露したやうな手紙を書いてやつて、人にも同じ喜を味ははせたいと思ふ。

(生きた文章の道)

一七 無線電信

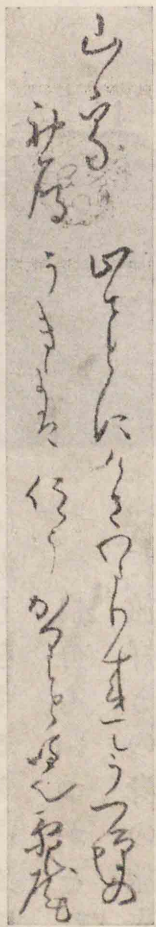
水上瀧太郎

水上瀧太郎
本名は阿部章蔵。
東京の人。文學者。
明治生命保険株式
會社員。

「日本に通じる無線電信は、今晚でおしまひだ。」と、電信局の人が注意に來てくれた。

カウカイブジ。

といふやうなのが、いくつもいくつも繰返されて居るのである。自分も父母を喜ばせるために、何かひとこと言ひおくらうと思つたが、無事といふ以外に、言ひたいことは何もなく、たゞ、無事といふだけでは、あんまり物足りなさ過ぎる



香川景樹筆蹟

ので、手帳を出して、あれこれと、近頃の自作の歌の中から、適當なのを選ばうと思つた。

景樹の流を汲んで和歌をよくする母は、自分達兄弟姉妹が、時折父母の家を離れて旅にでも出た時とか、母自身が家

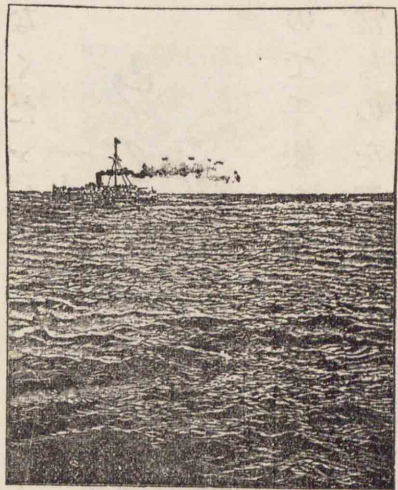
筆蹟

山家初雁
山さとにけさわたり
來てうつ蟬のうき
きは住うかりと
鳴く也 景樹

景樹

香川氏。號は桂園。
鳥取縣(因幡)鳥取
の人。江戸時代末
期の歌人。

を留守にした時に、必ず我等に對して、子を思ふ親の心を、三十一文字にこめては書きおこすのであつた。見やう見ま



ねで、兄も姉も、幼い時から歌をよみ習ひ、母から送られた時には、返しをするといふ風であつた。自分もいつかそれになら

つて、旅好きの身の、旅先から、強ひても母の好きさうな古風な歌を詠みだしては、書送るのを習としてゐた。

丁度この夏も、自分は、自分の拙い歌を拙い文字に認めた、行くさきくゝの、うまやちからの繪葉書の、いかばかり母を慰めるかを想ひ、また知る人の訪ひ來るまゝに、いかに母が誇りに人々にそれを示すかを想像しながら、九州路の旅に日を暮らした。

しかし、今自分の手帳には、旅の歌が一首もなく、船に乗つてからも、時折はきれくゝに浮ぶ想ひを歌はうと努めはしたけれども、どういふものか、どうしてもそれがまとまらないのであつた。幾たびもくゝ短いありふれた句を、手帳に書いては消し、書いては消したあとで、あれこれとつなぎ合せて、漸く次の一首にまとめたのである。

ヤスラカニウミノイクヨハアケニケリチチハハノ
イヘコヒシトオモヘド

自分はその電報が、恰も父の寢酒の時刻にわが家に着くやうに、無線電信係の人に頼みこんで、それで今日は一層安らかな心になつた。

父は近頃とみに量の少くなつた酒に陶然としながら、なんだ、つまらない。」といふやうな顔をして見るにちがひない。しかし、その心中の嬉しさは、隠さうとしても隠しきれず、見ないやうな風であながら、電報の歌を諳んじるにちがひない。母はもうたまらなくなつて、目がしらに涙をにじませながら、幾たびもくく口ずさんだ後、妹にも、弟にも、さては女中達にまでも読み聞かせるにちがひない。明日からは、あの家の夫人、その家の奥さん達に逢ふ度毎に、わが子の歌を

唇に上せるにちがひない。自分にはよくそれが見えるのであつた。(海上日記)

一八 乃木將軍

森 鷗 外

乃木將軍
名は希典。陸軍大
將。伯爵。大正元
年歿、年六十四。

森鷗外
名は林太郎。島根
縣の人。醫學博士。
文學博士。大正十
一年歿、年六十一。

ベトン
Beton, コンクリ
ートの一種。

二零三
二百三高地。爾靈
山ともいふ。標高
二〇三米突。

つはものゝ武勇なきにはあらねども、
眞鐵なすベトンに投ぐる人の肉。
往く者は生きて還らぬ強襲の
鋒をしばし轉じて、右手のかた、
圖上なる標の高き二零三、
巔の二つ聳ゆる石山に

霜月

明治三十七年

高崎山

高崎縣隊で占領したのでかく名づける。

柳樹房

族順口の東北。攻圍軍總司令部の所在地。

曲家屯

二〇三高地の北。双島灣の東。

たえんゝの望のいとを懸けてこそ
きのふけふ軍の主力を向けてし

二

霜月の三十日の夕まぐれ、
將軍は高崎山の師團より

たゞ一騎、柳樹房なる本營に
歸らんと、曲家屯をぞ過ぎたまふ。

ほの暗き道のほとりを見たまへば、
身うち皆血に塗れたる卒ありて、

そびらには、はやこときれし將校の
亡骸をかきのせてこそ立てりけれ。

三

「汝は誰ぞ。そを何處にか負ひてゆく。」

「聞こし召せ、背負ひまつるは奴わが
主と頼む乃木將軍の愛兒なり。」

年老いし將軍の家の二人子
そのひとり勝典ぬしはいちはやく

南山にうたれ給ひて、残れるは
おとうとの保典のぬしひとりのみ。

背負へるはその一人子の亡骸ぞ。

四

父君は心を、しく、我が主をも

勝典

乃木將軍の長子。陸軍歩兵大尉。明治三十七年五月二十六日戦死。年二十六。

保典

乃木將軍の次子。陸軍歩兵少尉。明治三十七年十一月三十日、二〇三高地で戦死。

友安旅團
陸軍少將友安治延
の率ゐる後備歩兵
第一旅團。二百三
高地占領に最も奮
戦した隊。

隊附のまゝにあらせて、『討死の
身の果はおのれと三人葬はなむしをば
ひと時に營め。』と宣のたまひ給ひしを、
人々の強ひて計らひつるにより、
さいつ頃友安旅團の副官に
職かはり、まだ程經ぬに、この朝開あさひ
あへなくも空しき骸となりましぬ。

五

果てましゝ處は高地二零三。
目鏡めがねもて敵の備を望みます
うら若き額のたゝ中打ちぬかれ

この村
曲家屯。

ひと言をのたまはんひまもなく
持口もちぐちの南の峰にうせたまふ。
その骸を奴背負ひて、この村に
ありと聞く野戦病院たづぬれど
くるほしき心からにやたづねえず。

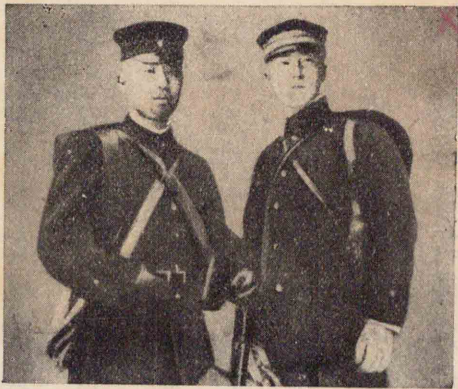
六

かくいふを駒をとめて聞きましたし
將軍は、病院の旗ある方を、
鞭あげて「彼方にこそ。」とさし給ふ。
面ざしはかはたれ時に見えねども、
目ざとくも雲の絶間ゆ覗ひし

さむ空にまだ輝かぬ冬の星、
更闌けて、友なる星に、將軍の

睫毛だに動かざりき」と語りけり。

(うた日記)



(左) 典勝 (右) 典保

嗚呼此の一語

土屋 鳳洲

旅順既に降る。或人乃木大將を訪
ひて、戦捷を賀し、且其の二子の戦歿を
弔ふ。大將泣然として曰く、七月以來我幾萬の愛兒を喪へり。
吾が二兒の如きは平生の訓言を守りしのみ、何ぞ深く悲しむに

土屋鳳洲
大阪府(和泉)の
人。名は弘、漢學者
大正十五年(一九二六)
歿、年八十六。
二子
勝典・保典。



—(筆重廣) 雨白の野庄—

國富信一
東京の人。中央氣
象臺技師。

鬼貫
俳人。姓は上泉。
元文三年(三九)歿、
年七十八。

足らんや。」と。嗚呼此の一語、以て神人を泣かしむ可し。

一九 雲の峰

國富信一

鬼貫の句に「夕立や隣在所は風吹いて」といふのがある。篠つくやうな大雨が降つてゐるかと思へば隣在所にはそよ風が吹いてゐるといふやうに、極めて局部的なのが夕立の特性である。昔から、夕立は馬の背を分けるといつたのもこのことで、誠にきびくとした男性的なものである。夕立の降る時間も一般に極めて短く、一時間を越えることは珍しい位である。それ故、強雨に遇つても、それが正しく夕立であるなら、雨宿りをして止むのを待つに限る。夕立

丈草
俳人。姓は内藤、
名は林右衛門。芭
蕉の弟子。元祿十
七年(三六四)歿、年
四十五。

其角
俳人。榎本氏。芭
蕉十哲の一。寶永
四年(三六七)歿、年
四十七。
麥水
俳人。堀田氏。天
明二年(三四三)歿、
年六十三。

の降る時間の短さをよんだ句として、

夕立に飛びのく月や松の上丈草

などは面白いと思ふ。
また夕立の時の雨宿りの様や、人の駆けゆく様などは、氣
の毒とはいひながら、第三者として見ればなかく、趣が深
い。私なども子供のころには、夕立となると必ず窓により
かゝり、電光を浴びながら外を眺めてゐたものである。

夕立や法華驅込む阿彌陀堂其角
馬ながら軒へ驅込む夕立哉麥水

夕立は冬にもあるが、然し殆ど夏に限られたものといつ

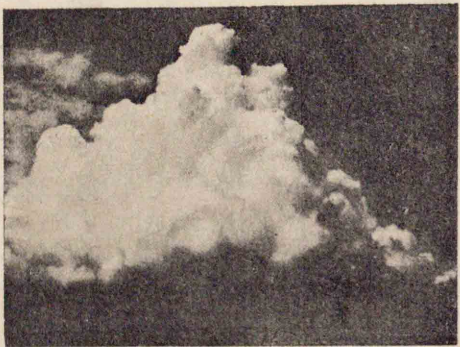
てもよい位夏に多い。なぜ、それならば夕立は夏に多いだ
らうか。勿論これは、夏の強い日射が主な原因となつてゐ
ることは誰しも直ぐに考へつく所であらう。
夏になると日射が強くなる結果として、地面は強く暖め
られる。さうして暖められた地面に接してゐる空氣もま
た暖められて膨脹し、氣壓が下つて軽くなる結果、高い所へ
上昇して行く。これが上昇氣流といふものである。
日射の結果上昇氣流が盛になると、昇つて行つた空氣は
高い所へ達し、上層の氣壓の低い所へ行くに従つて益、膨脹
して溫度が低下する。さうして遂にはその溫度は零點に
達し、中に含まれてゐる水蒸氣は凝結して、小さな水滴とな

つて雲を生ずる。

上昇氣流が盛なときには、昇つて張つた空氣は雲を生じても、なほ上昇を續けるから、これから上の方では、雲の形によつて上昇氣流の有様がよくわかる——それは、恰度煙突から吐き出される煙のやうに、むく／＼とした形になる。

かうして上昇を續ける雲は、上昇の勢ひが強いときには優に十キロ以上も昇つてゆき、むく／＼と盛上つてゆく頭が、まるで入道のやうに見える。このやうな雲は全く夏にのみ限られて現はれるものであつて、入道雲とか、雲の峰とかいはれてゐる。學名は積亂雲と呼ばれる。

*



雲の峰

紺青のやうな夏の海、碧空を背景として群れ飛ぶ鷗、さうした和やかな景色の中に、遠い空にむく／＼として立つ雲の峰は、夏といふものにふさはしいものである。

然し雲の峰の雄大さは、何といつても高山の頂、例へば富士の山頂あたりから見たものであらう。御來迎の一閃と共に、今まで身ゆるぎもせず眠つてゐた谷々から、先づ白雲の躍動が始まつてくる。これが日の昇るに従つて激しく、はては己が足下を目がけて奔騰し始め、更に高く昇つて

は雲塊重疊として、今にも頭上に崩れ落ちんばかりの勢を示し、飛電閃々と雲間を縫つて走る。

此の壯觀は、夏の登山者の多くにのみ許される大自然の繪卷物である。

かうして渦巻きつゝ上つて行つた雲の峰も、登りつめてその上昇勢力を失ふと、上層を吹く風のために頭部が水平に押流されて、舌のやうな形となつて風下へ伸びてゆく。その時の雲の形は、恰も鐵砧のやうになるところから、特に鐵砧雲の異名がある。さうして風下に押流された雲の峰は、その延びてゆくさきくに強雨を降らし、電雷を起すのである。

*

夕立の時には、必ず電雷を伴ふやうであるが、これもまた雲の峰の中に藏された雷氣によるのである。

漱石

夏目漱石。

雲の峰雷を封じて聳えけり 漱石

雲の峰の中に雷氣を含んでゐる原因としては、色々な説もあるが、確からしい説によればかうである。今、水が地物などに當つて飛沫するときには、水滴と空氣の分子とは兩者反對に帶電せしめられる。同様に雲を作る水滴が上昇するときには、水滴と空氣分子とは矢張り反對に帶電する。かうして雲の峰は上昇の途中、帶電によつて得た電氣量を多分に蓄積してゐるから、これが崩れて風下の方へ押しよ

せたときにも、その雲中には多量の電氣を持つてゐる。さうして遂には雲と雲、雲と地面との間に放電現象を起して、電雷落雷の現象を起すのである。

かやうに眞夏のころ赫々たる日に照されて、うだり果てた午後など、遠くに立つ雲の峰が崩れ落ち、また、く間に紫電一閃、覆盆の如き大雨沛然として降りくるなどは、實に涼味満喫である。

稲妻やうつかりひよんとした顔へ 一 茶

二〇 洋上の月

服部純雄

わたしが始めて渡米したのは、丁度世界戦争の最中であ

服部純雄
元岡山縣金川中學
校長。

一茶
俳人。姓は小林。
俳諧寺とも號し
た。文政十生（四八七）
歿。年六十五。

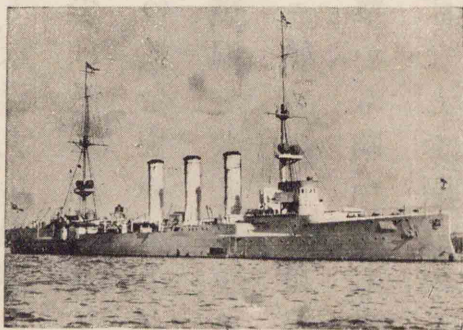
エムデン
大戦當時の獨逸巡
洋艦。三五四四
噸。大西洋印度洋
を荒れ廻つて多く
の商船を破壊し
た。
布哇
太平洋の東部にあ
る十餘の群島。
天洋丸
日本郵船會社の汽
船。

つた。獨逸のエムデンとかいふ軍艦が、太平洋まで荒れまはるとの噂が囁しかつた。それで、布哇に近づく頃になると、天洋丸の船窓といふ船窓は悉く黒幕で掩はれ、甲板の電燈は悉く消されてまつくらだつた。そして、いざといふ時の救命袋やボートへ乗り込む練習が、船員と船客との間に幾遍となく繰返されたのであつた。

始めのほどは鼻先で馬鹿にしきつた連中も、だんく瓢箪から駒を出し、神経質の女達は、よるとさはるとエムデンばなしで賑はつてきた。

ある日の夕ぐれ、もう太陽は赤々と水平線に躍り込み、赫とした珊瑚色の夕焼も失せ、蒼茫たる微光が空と海とを包

んだとき、船内俄かにざわめきたち、物々しい光景がわたし達の前に展けて来た。



エムデン号

左舷の甲板にも、右舷の甲板にも、船員達が緊張しきつて、各自の受持配置へと靴音高く走りまはつた。

「なんですかね。」

と私がたづねると、眉の太い老水夫の一人が、

「不思議なところに、不思議な航海燈が現れたのですよ。敵艦エムデンに相違ありませんぞ。」と、怒鳴るやうに言ふのだつた。

「どこらですか。」

と言へば、

「そら、あすこですよ。」

と指さして、そのまゝそゝくさと向うへ飛んで行つた。

見ると、はてしなき蒼穹と渺漫たる大海原との接する、水天一髪ともいふべきところに、成程、航海燈らしいものが薄光りに光つてゐるではないか。

船橋はと見れば、そこにはビール樽のやうな古參船長以下新進の運轉士まで、最高幹部級が悉く參集して、いづれも雙眼鏡片手に、きつと前方を見つめてゐるではないか。

船客中には、早くも救命袋を慾張つて三つも背負ひこみ、

よち／＼甲板を這ひまはるもの、遺書を書くのだ、ペンはな
いかと立ちわめくもの、金切聲で仲間
を呼ぶもの、おでことおでこを鉢合せ
して地團太を踏むもの、いやはや、船内
はあきれた騒ぎとなつて來た。



折も折、船橋のあたりで、かん／＼と噴飯ふきだした船長の、呑
氣な聲が響いて來た。

そこへ、エムデンが出た、エムデンが
出た。」と、大聲でふれ出した者があるた
め、三等船客や支那人達が、なだれを打
つて上甲板へと突貫して來た。

見ると、エムデンの航海燈が、だん／＼水面を離れ、まはりの薄雲がぼかされると、これはしたり、それはまんまるなお月様と化けてしまつた。あとで聞けば、これは、ときたま濕氣深い大洋上にのみ起る水蒸氣の不思議な惡戯いたづらであるさうな。

ともあれ、この童話めいた一大事實は、滿船の人達に無限の情味を湧き立たせ、陽氣な笑聲があちらこちらで爆發した。

白服の老船長は、甲板の籐椅子連に近づき、無邪氣な洒落まじりで、濃き葡萄酒の盃を舉げつゝ、海路の太平を壽ぐのだつた。

メインマスト
Main Mast.
主橋の意。三橋の船では中央の橋を指し、二橋の船では後部の橋を指す。

廣重

歌川一立齋廣重。
浮世繪師。安政五年(三六)歿。年六十二。



吾等は、甲板の冷たいしめりと、流れ来る海風とに、萬斛の涼を楽しみながら、冷えきつた紅い西瓜を立ち剪り、バナナアイスクリームを舌に上せて、思はぬ明月の夜を楽しむのであつた。甲板のそゞろあるきの誰やらが、戦争もこんなことから始まるのだらうと、高聲に話しながら過ぎて行つた。

エムデンの航海燈は、既にメインマストの頂上に近く、悠悠として輝く鏡面を研ぎすまし、廣重の繪に見る濃藍色の大海原は、微茫として遠く打煙り、これもお伽噺の世界に棲む瓢輕者の飛魚が、金銀の波をくゞつて、箭の如く船側をかすめては、姿を隠すのであつた。(雜草の花)

グラフ、ツェッペリン

號
Graf Zeppelin, 獨逸航空界の覇者ツェッペリン伯の名を冠した飛行船。

圓地與四松

石川縣の人。元東京日日新聞社員。

八月十九日

昭和四年

霞ヶ浦

茨城縣にある大湖。西岸に海軍航空研究部及び航空隊がある。

内浦灣

渡島・膽振兩國に包まれた灣。

二一 グラフ、ツェッペリン號に乗つて

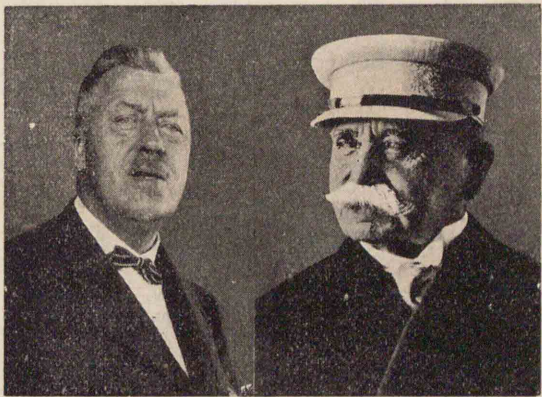
圓地與四松

八月十九日。
午前六時起きる。今日は霞ヶ浦着陸の日である。少し靄がかゝつてゐたが、日が照り出すと、すつかり日本晴に晴れわたつた。

午前七時頃から北海道を横斷し始めて、七時半には内浦灣に出た。北海道の地にさしかゝると、その燈臺に日の丸の國旗を出して我々を歓迎してくれたのは、實に嬉しかつた。諸所の村落でも、村人達が往來に出て仰ぎ見て、ハンケチを振つたり、旗を振つたりしてくれた。海の上に出て

駒ヶ岳
渡島北部の火山。

エッケナー博士
此の飛行船の總指揮官。
レーマン船長
此の飛行船の船長。

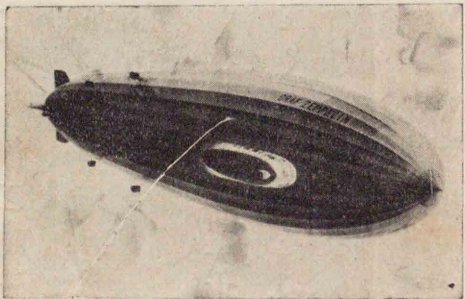


(左) 博士エッケナーと(右) 船長レーマン

からも、ずつと右手に北海道を眺めながら進んだが、八時半頃には遙かの彼方、右手に駒ヶ岳を眺めることが出来た。
北海道を去つてからは、みちのくの山河を右に見ながら進む。空は全く晴れわたり、美しい故國の山々が遠く近く蜿蜒として連なり、海上には又小さくも可愛らしい發動機船が躍つてゐる。乗客は、誰一人この美しい日本を歡賞せぬものはなかつた。
午餐の時、エッケナー博士もレーマン船長も極めて嬉しさを

イセリン君
スイス國の退役陸軍中佐。
アルバカ
Alpaca. アルバカといふ獸の毛をきざせて織つた布。

北野君
大阪朝日新聞記者
北野吉内。



ツェッペリン伯爵號

うであつた。
次第に夏らしく暑くなつて來た。イセリン君の如きは、もうアルバカの上着に着換へてゐる。そして、もう暑くなつたからね。」と得意になつてゐる。午後二時になつた。誰も落ちつかない。たゞはち切れさうな期待で東京の空へ出ることを待つてゐる。折柄樺太廳長官縣忍氏から、北野君と私とに宛てて、「今回天空一最初の樺太の上空に迎ふるは、衷心歡喜に堪へず。全島民

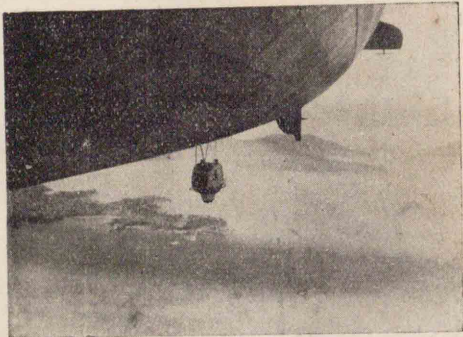
を代表して深甚なる敬意を表す。貴下並に乗組員各位の御健康を祝し、絶大なる成功を祈る。」といふ電報を寄せられた。午後二時、三時となるに従つて、日本人の記者は忙しくなるばかりだ。私はこの筆のつゞく限り書きつゞける決心である。

午後三時二十五分には四臺の飛行機が来て、我等を迎へてくれた。その中に本社機も見えた。三時三十五分には太田を通過する。人々は皆往來に出て、仰いで眺めてゐる。私は大急ぎで荷物を片づける。その間にもう牛久沼に來た。時に四時十五分である。漸く荷物の仕度を済ました私は、ホールへ出て來ると、カメラマンは大急ぎで相呼應

太田
茨城縣久慈郡太田町。
牛久沼
茨城縣稻敷郡牛久沼村の西部にある。
ホール
Hall. 廣間。
カメラマン
Camera-man. 寫眞師。

しながら、撮影に忙しい。

はや利根川だ。「もう何十分で東京か。」といセリン君が聞きに來る。そこへ藤吉少佐が飛んで來て、「航空司令に電報を打つたのだからタイプライターを打つてくれないか。」と頼んで來る。「今より東京横濱を廻り、六時より七時の間に着陸す。」といふ電報である。かうしてゐる間にも、いろ／＼の人がいろ／＼なことを聞きに來る。地上の人達は、今私がこんな忙しい思をしてゐるとは、一人として想像してゐるものもあるまい。



金山華沖を飛ぶエツ伯號

藤吉少佐
海軍少佐藤吉直四郎。
タイプライター
Typewriter. 印字機。

谷中
上野公園の北方

モーター
Motor. 發動機。
廣小路
上野公園前の大通り。

松坂屋
百貨店。
ドラモンド、ヘイ
北米合衆國の婦人
新聞記者。

グラフ、ツェッペリン號は今や關東八州を眼下に見て、東京に進みつゝある。四時十五分、谷中^{やなか}の方面から東京に入った。先づ上野公園が見える。博物館の青や丹^{あか}の屋根が目立つ。美術館が想像よりも大きく見える。西郷の銅像の邊は非常な群衆だ。恐らく手を振りつゝ萬歳を叫んでゐるのでもあらうか。モーターの音に妨げられて聞くべくもないが、その熱狂の様だけはうかゞはれる。廣小路に大きな建物が聳え立つてゐて、屋根は満員客止といふ盛況だ。いはずと知れた松坂屋だ。

私はこの邊からホールを去つて航空室に入つて、ドラモンド、ヘイ女史と竝んで見おろす。女史はいふ、いよく參

りましたね。」と。

我々はやがて東京驛の上にさしかゝつた。驛前から宮



(野北・吉藤・地圓) 人本日三の乗同

城へかけての廣場は實に美しい。遙かに莊嚴なる宮城を拜した。宮城の青錆びた屋根は、丸の内一帶の洋式建築と一種の對照をなしてゐる。我が東京日日新聞社の屋上にも、我が同僚が澤山集つてゐる。あゝわが友よ、故國を去つて三年、今この空中から兄弟等に對して、なつかしさに堪へない。遙かに挨拶を送る。と、いつか品川から大森へかけて飛んでゐる。

品川・大森
東京市南部の兩區。

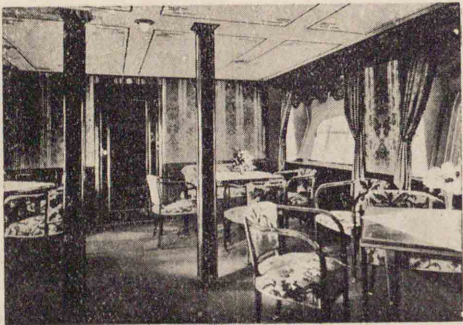
丸の内
宮城の東北に接する一郭。

五時過ぎ横濱に來たわがグラフ、ツエッペリン號は、再び東京へ同じ道を引返し、ひたすら霞ヶ浦へと急ぐのであつた。もう六時である。夕陽の影は曇れる空にその姿をかくして、今はたゞ靜かに黄昏のけはひが野の末を包まうとしてゐる。もう霞ヶ浦だ。格納庫の上に來た。六時三分だ。庫前の野原には無数の見物人が集つて、しきりに手を振つてゐる。

グラフ、ツエッペリン號は更に霞ヶ浦を横きつて、一回轉して格納庫に向つた。カウダ博士は一所懸命でタイプライターを打つてゐる。着陸したらすぐ電報を打つために、その文案をたゞいてゐるのであらう。

カウダ博士
ドイツのテンボ紙
主筆。

ミッツ
Mitze、獨逸語、鏝
のない帽子。



部一のンロサ號伯エツ

ドラモンド、ヘイ女史は輕快な洋服に着換へ、茶色のミッツエをかぶつてホールへ出て來た。「どうですか。」と聲をかいたら、「わたしは非常に幸福です。なぜつて、再び好きな日本を見るのですもの。」といつて微笑する。

もうずつと下降したと見えて、地上の聲が手に取るやうに聞える。六時十五分だ。風の吹く方向に轉換した飛行船は、しづくくと格納庫の上に來た。航空室ではしきりに合圖の鈴が鳴つてゐる。

二條の綱がするくと地上に投げ下される。白い作業

ゴンドラ
Gondola. 飛行船に
ついている吊船。

サロン
Salon. 客間。

服の水兵達が、それを受取ると同時に、さつと二隊に分れて曳きはじめた。白蟻の如き水兵の二隊が二條の白蛇の如く伸びて行くと、それに従つて機體は徐々に地上へ下降して行つた。そして水兵達の手にゴンドラが受けとめられた頃は、あたりは夕闇が迫つてゐた。

サロンの窓から外を見ると、霞ヶ浦の飛行場を取巻いてゐる群衆が堤の如く黒く、遠くに見える。それを制してゐるらしい騎馬巡查の縦横に走つてゐるのが手に取るやうに見える。白服の海軍將校や水兵達が右往左往し、何やら聲高にいつてゐる。ゴンドラに手をかけてゐる水兵は、窓から顔を出してゐる我々を珍しげに仰ぐ。そしてお互に

何か話し合つてゐる。

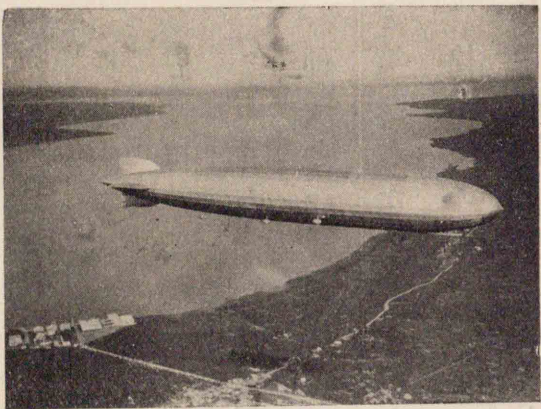
「實に眺望のよい美しい飛行場ですね。」

といふのは、ハースト社のフォン、
ヅキガンド君である。

「まあ、なんて勇ましい水兵さん
達でせう。」

と感嘆するのは、ドラモンド、ヘイ
女史である。

乗客の誰も彼も皆珍しさに
窓から顔を出し、いづれも嬉しさ



霞ヶ浦上空のツェッペリン伯號

うである。

ハースト社
北米合衆國の有名
な新聞社。
フォン、ヅキガンド
ハースト社の新聞
記者。

ガイゼンハイナア
ドイツの新開記
者。

カウダ博士、ガイゼンハイナア・イセリン等の諸君が、私の側をやつて来て、

「やあ、いよ／＼着きましたね。どうです、嬉しいでせう。」などと、口々に祝辭を述べてくれる。エッケナー博士も、

「このうちで一番幸福なのは圓地君さ。今日は圓地君は神様と一緒にゐるやうなものだよ。」

と、笑ひながら私の肩を叩いてくれる。

格納庫の入口とゴンドラを照らすサーチライトの光が夕闇を貫いてきらめく。水兵達は徐々にゴンドラを肩に前進を始めた。と、遠くの見物人の群から「萬歳」の聲と共に拍手の音が聞えて来た。私は窓から顔を出して、誰か知つ

サーチライト
March light 探照
燈。

た人でもゐないかと思はしたが、遂にそれらしい人達の姿を見ることが出来なかつた。私は、たゞあちからもちあちからも湧きあがる「萬歳」の喊聲に答へるために、絶間なく手を振つてゐるだけであつた。

グラフ、ツェッペリン號は遂に格納庫の中に收つた。

(空の驚異ツェッペリン)

福田正夫
神奈川県の人。詩
人。

二三 丘のほとり

福田正夫

秋風の丘のほとり

紫色の夕空さびしく光り

地は山々まで靄につゝまれ

坂を下る農夫のすがたが
静かな影繪をゑがく

はだかの子供が一人

まだ鍬をふつてゐる

黒い土が崩れ 碎け 散る

その背景に海が

森の上を越え

廣くく 遠くひろがる

秋風はその海の上をも

渡つて來るであらうか

海は黒く光り

青く疲れた水の色が

空の暗さと映り合ふ

鮮かな山の端の黄金なす光

それらがうすばやけて來ると

子供は「おゝい」と隣の畑に呼びかける

見えなかつたその父が

ひよくりと豆畑から立上り

「もうしまふべえよう」と

のろくと歩みを移して來る

空も暗くなつた

風も寂しくなつた

私も畫中の一人のごとく

うすぐらい丘の路を

物思ひつゝ下り行く

二三 初秋の窓から

相馬御風

わが待ちし秋は來ぬらしこの夕草むらごとに
蟲の聲する

相馬御風
名は昌治。新潟縣
の人。文學者。

良寛和尚

俗名山本榮藏。新
潟縣(越後)出雲崎
の人。禪僧。詩歌
を善くした。天保
二年(四七)寂。年七
十四。

これは良寛和尚の歌である。一見平凡のやうで、しかもしみるゝと胸にしみ入る力を持った歌である。「このゆふべ」といふ第三句がよく利いてゐる。ふと蟲の音に心をとめた刹那の心の動きが、「このゆふべ」の一句でびたりと捉へられてゐる。今までぼんやりして氣づかずにもたが、今晚ふと心をとめて聴くと、どこの草叢からも蟲の聲がきこえる。その蟲の音を聴くと、いよゝゝ自分の待つてゐた秋が來たらしく感ぜられる。——一首の大意はそれほどのところであらうが、それだけのさりとした表現のうち、秋を待ち得た歡びも、更に、自然の推移に對する驚きといつたやうな心持さへも感じられる。この歌に比べると、かの有名

秋來ぬと
藤原敏行の歌。(古今集)

な

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ
おどろかれぬる

といふ古歌の現はし方などは、説明に墮してゐて實感味に乏しい嫌ひがある。「おどろかれぬる」などことわつてゐるところに、却つて「おどろき」が捉り逃されてゐる。

だが、そのやうなことはさて置き、以上の二首とも音によつて初めて「秋」を感じてゐる點で相通じてゐるのは面白い。「秋は蟲の聲より」——かう一人は感じた。「秋は風の音より」——かう他の一人は感じた。そこが一種の興味をそゝる。これらの名歌と比べようといふのではないが、私は嘗て

こんな歌を詠んだことがある。

わが吹きし煙草の煙の行末を今朝しみくくと

眺めたりけり

毎朝起きたての茶の間の爐傍に安座して、心靜かに一二本の煙草をくゆらすことが、この數年來の私の大きな楽しみの一つである。その朝も私はいつもの通りに、それをやつた。ところが、どういふはづみであつたか、その朝に限つて私の視線が不思議に窓から見える空へと引きよせられた。何といふ澄みきつた空の色だ。何といふそれはさやけさだ。そしてそのさやかに澄みきつた大空へと、靜かに亂れずに立ち昇つて行く細い煙の姿。しかもそれは私の

口が吸つては吐き、吸つては吐きしてゐる煙ではないか。あくまで靜かに、あくまでもゆるやかに、その紫がかつた白い煙は、深く澄んだ空へと高くくゞ昇つて行く。そのかほしい、末は消えてしまふべき運命を持つた一條の煙——私の眼は、私の心は、いつとなしにしみくゞとその煙の行末にと引きつけられてゐたのであつた。

その大空の色と、その煙の姿！ 私はそこに初めてしみじみと「秋」を感じた。「秋」は大空より、「秋」は煙の姿より——その朝、私は更にそんなことまで感じたのであつた。

しかし、季節の推移は、必ずしも何々から感じられると限つてはゐない。それは時に全く思ひがけないさゝやかな

現象や些細な事柄から感じられることがある。それは年にちがふ。それは人によつてちがふ。いかに細かな、いかに深い注意を以て觀察してゐる人にも、季節の推移の眞に感ぜられるのは、恐らくいつでも「ふとして」であらうと思はれる。

季節の推移は年々歳々同じやうに繰返されてゐるのであるが、しかし年々歳々にそれは新しく感じられる。「あゝ、もう秋だ。」といったやうな驚きも、年々に新たである。自然は常に新たである。自分の庭にある木や草でさへも、見るたびに新たな氣持がする。人間の造つたものは、如何に美しくても、いつかは飽きずにもゐられないが、自然の風物は常

に新たである。

人間の造つたものでも、自然が與へるやうな、見る度に接する度に、新たな感じを與へるものほど貴い。また、何物に對しても、自然に對する時のやうに、常に新たな感じを持ち得る人は貴い。それは幼兒の心だ。生そのものに對して、常に新たな心を持ち得るものは幼兒である。「成人の後までも幼兒の心を失はないものが眞の詩人だ。」と云つたエマースンの言葉も貴い。(野を歩む者)

二四 童 心

北 原 白 秋

聖心は童の心である。

エマースン
米國の思想家。(西
曆一八〇一—一八八二)

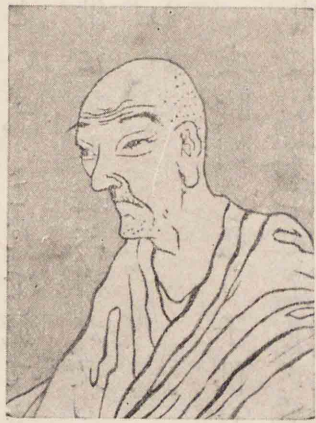
北原白秋
福岡縣の人。名は
隆吉。詩人。

越後の良寛禪師は、殊にこの童心の持主であつた。かういふお話がある。

一に童男童女、二に手毬、三におはじき、これが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きで、子供たちと遊ぶ事が、又どんなに嬉しかつたかといふことがわかる。

或時、例の通り子供たちと、かくれんぼをしてゐられた。鬼になつた良寛様が、目を瞑つて、「もういゝよ。」といふかはいい聲を一心に待受けてゐられる。と、丁度日のくれどきで、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちらちら點き出すと、子供たちは急に遊びをやめて、一人のこらず

こそくと歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛様も何もうつちやらかしてある。無論、いくら待つても、もういいよ。」といふものはない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來



良 寛

つてゐられた。

その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

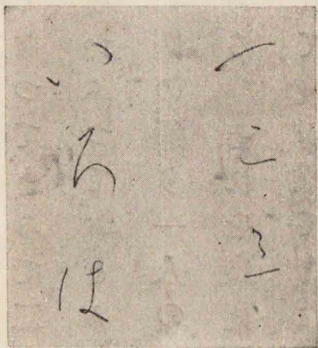
た。さうしてとうとう夜が明けてしまつた。良寛様は、それでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿したまふ、
「もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待

それから、また或時のことである。良寛様が、今度はかくれる事になつた。そこで、見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻むらの中にもぐり込んで、それはくく小さくなつて、まるで二十日鼠見たいに、頭からすつぽりと稻藁をかぶつて、おどくくしてゐられた。すると子供たちは、また例の通り一人のこらずこそくと歸つてしまつたのである。それを良寛様は少しも御存知がない。また日が暮れて夜が來て、また夜が明けた。

稻村には霜が眞白に置き、朝の日のぼり始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく稻たばを、やにはにはづすと、「おやつ」と驚いた。良寛様が小さくなつてもぐつてゐる。「お

や、良寛様が。」と云ふと、慌てゝ、そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける。」

その心のあどけなさ、ありがたさ、まるで子供である。



良寛筆蹟

また或日のことである。その良寛様が男の兒や女の兒達とお弾きをしてゐられた。沙門良寛全傳に

「禪師頗る大勝を博して賭物の熬豆を多く得。」と書いてあるから、餘程の乗氣であつたらしい。丁度其の時、誰れかがはひつて來た。そして、おやく、良寛様なか／＼あなた様はお弾きがお上手で。」と褒めると、罪が

ないこと、良寛様はぼうつと面を赤くすると、さも／＼恥かしさうに、そつとその熬豆を膝の下に押隠したといふ。その心の初々しさ。そのきまりのわるさ、恥かしさは、全く佛の前に子供らしく、おとなしく、身をへりくだる心である。尊い聖心は凡てこの童心を源にする。

禪師が如何に天真爛漫であつたかといふことを、もう一つお話する。

或時、赤々と實が熟れて鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供が一人泣いてゐた。良寛様を通りかゝつて、「どうしたんだ。」と圓い頭をさすつてやると、「あの柿が食べたい。」と

いふ。「よし／＼、それではわしが取つてあげる、泣くんでないぞ。」と云ひながら、やつとこさと木の上に匍ひ上つた。枝につかまつて、あれかこれかと探してゐるうちに、それは全



五合庵

くうまさうな柿の實だ、一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの、良寛様は夢中になつて噛るは／＼、まるで猿蟹合戦の赤いお猿のやうに、むしや／＼と食

べ惚れてゐる。下にある子供こそ哀れである。それを見て火のやうに泣き叫ぶと、始めて良寛様氣がついた。さあ、しまつた、これは、といふので、慌てて枝を揺つたといふ話。

五合庵(挿圖)
新潟縣西蒲原郡國
上山にある。良寛
が四十八歳より六
十一歳まで住んだ
處。

思うてもその慌て方をかき、罪のなき、真正直さ。その子供らしさ。全く涙がこぼれるほど嬉しいではないか。

禪師の玉のやうな此の童心は、榮藏と云つた童の昔その儘である。それは何物にも代へ難い、二つとない尊い天稟である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。ある日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。そこでまた叩かれた。「親を睨むやうな奴は鰈になるぞ。」これを聞いた良寛様の榮坊は、外へ出て行つたが日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中大心配で、あちらこちらと捜し索めると、

或濱邊の岩の上に、悄然と佇んで沖の方ばかり眺めて居た。「榮坊、どうした。」と云ふと、榮坊「おれは、まだ鰈にならないか。」鰈になると云はれたので、ほんとに鰈になると思つて、一心に海を見つめてふるへて居た童心の正直さ。これをこそ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。聖心はこの童心を源とする。 (洗心雑話)

○

良

寛

霞たつながき春日を子供らと手鞠つきつゝ、今日もくらしつ
のみしらみ音に鳴く秋の蟲ならばわがふこころは武藏野のほら

世の中にまじらぬこにはあらねどもひこり遊びぞわれはまされる

二五 障子

鶴見祐輔

鶴見祐輔
群馬縣の人。思想家。

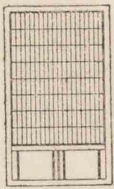
日本の障子といふものについて、誰か面白い研究を發表してもらへまいか、と私は始終考へてゐる。

日本へ歸つて來て、うれしいものの一つは障子である。家のうちに坐つて、白い障子の紙を通して來る光線ぐらゐる心持のよいものは少い。

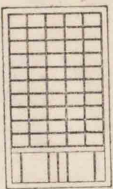
晴れた日によく、雨の日によく、燈火をつけて後の夜は更によい。

私は自分の書齋が、どうも氣が落着かないので困つてゐた。しかしどういふ譯とも知らずに五年ほど過した。つい近頃障子が無いからだと氣がついた。三方の一方だけが障子で、他の二方を磨硝子にしてあつた爲、机に落ちて來る光線に落着がなくて、さてこそ氣が落着かなかつたのだ。その二方の磨硝子のところへ障子をたてて見たら、すつかり部屋に落着が出来て、いくら書きものをしてても草臥れなくなつた。矢張吾々の先祖は、この風土と吾々の性情に適するやうな工夫を、住居の上にも凝らしてくれてゐたのだ。さうして私のやうな素人には解らないが、障子にはいろいろな種類があるもののやうだ。その部屋の工合と、仕事の種

障子の組方
(たてしげ)



(たてしげ)



類で、障子の種類も變へるのがいゝであらう。縦に棧の細かい「たてしげ」や、醍醐障子といふ棧の太い素朴なのや、その好みによつて用ふるところを異にすべきであらうと思ふ。日本の風景を美しくするものは、矢張この障子である。久方ぶりて日本に歸つて來て、灯ともし頃民家につくあかりを車窓より見渡す氣持といふものはない。四邊の風景が、白い紙に赤々とうつる燈火の色で軟いでくる。人影の障子にうつる様子などは、日本でなくては見られぬ情緒である。

その代り、冬時の寒さを凌ぐ装置としては、これは又驚くほど不完全なものである。あるフランスの婦人が、はじめ

て日本家に冬住んで、日本婦人は驚くべき人間だ。一枚の紙をもつて全宇宙と戦ふ。」といったといふが、面白い観方であると思ふ。

西洋人、殊にアメリカ人が日本へ来て羨ましがるのは、日本建築の白木造である。木を自然のままに出して使つてゐるのが、たまらなく氣に入ららしい。それは日本人に次いで、木造の家を好むのはアメリカ人であるからだ。あるアメリカ人は、私の家へ来て、木の柱を幾度も撫でながら、「いゝなあ〜。」と子供のやうに羨ましがつた。

私は今日の日本が、美しい日本趣味を次第に失ひつゝ、あることを悲しむ。しかしそれも風雅な日本趣味の代りに、

純粹な西洋藝術が入るのなら、なほ慰むるところもあるが、アメリカ新開地に見るやうな、安い俗悪な文化住宅であるのは、日本の近代化のあまりに高價であることを思ふ。

(中道を歩む心)

二六

ボーイスカウト

三島 章道

ボーイスカウト
Boy Scout
三島章道
名は通陽、東京の
人。子爵。貴族院
議員。少年團日本
聯盟理事。

先度の震災
大正十二年九月一
日の關東大震災。

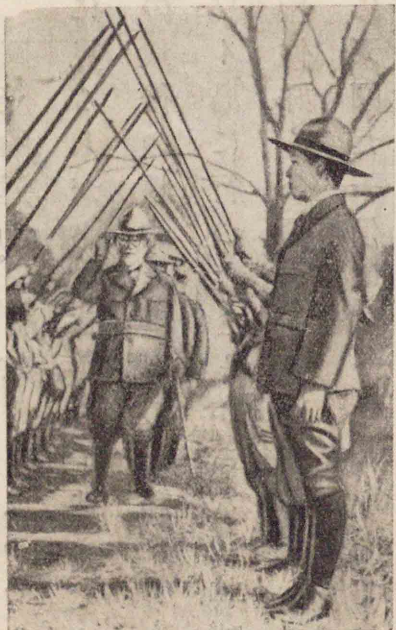
團體的社會的の訓練。最近になつて漸く我が國にも、ボーイスカウトの機運が向いて來た。殊に震災後に於て、スカウト運動は全國に起つて來た。先度の震災は我々に何を教へたか。あの震災で潰れもしなければ、又焼かれもしなかつたものがある。それは何かと云へば、人の心であ

る、人の強さである。

東京の人は震災時に於て何を發見したかと云へば、先づ頼むべきは「自己の力」、次は「團體の力」、社會の力「だと云ふことであらう。火災は恐ろしいが團體訓練の力は、たしかにこれに打勝つものであることを知つた。又火災が起つて了つたら、それを團體の力で消止めるより仕方がないが、その火災を起す前に、先づ注意することがもつと大切であらう。社會の爲に自己の責任を感じて、災害を未然に防く、それが即ち社會的訓練の一つである。次にあゝいふ場合、我々の行ふことは「本能的自治」とも云ふべきもので、自警團などはその一端として表はれたものであるが、團體的社會的訓練

の無かつた我々は、遂にそれにも失敗をした。

ボーイスカウトとは、この自己の力を養ひ、且つ團體的訓練社會的訓練自治と云ふ事を、子供の時からさせようとする所のものである。



ボーイスカウトの列

野外教育。現今の教育は、屋外より室内へ室内へと入り、机上の學問に向つて進みつゝある。ボーイ

スカウトの教育は、屋外へ屋外へと出て行くもので、學校の休日を利用して、なるたけ子供等を野外に伴れ出し、その健

康を増進させると共に、實際に就いて動物・植物・天文・地理・化學等を教へるものである。

國際的運動。ボーイスカウトを以て軍國主義のやうに見る人があるが、決して然うではない。ボーイスカウトの最後の目的は「世界の平和」にあるのである。私は曾てハワイ島に行つたことがある。其時日・支・米・土人の子供等が、皆仲好く公園で一緒に遊んでゐるのを見て、子供の國は眞に天國だ、子供の時からかうして一緒にすれば、誰だつて仲よくなると思つたことがある。スカウト運動は即ちそれであつて、今こゝに日本の一少年團が出来れば、それは世界のスカウトと兄弟になるので、共に手を取つて助け合ふこ

ハワイ島
太平洋の東部にあ
る列島。米領。

ブラザース フロム
ジャパン
Brothers from Ja-
pan.



ボーイスカウトの敬礼

とになるのである。スカウトでは、この「兄弟」と云ふ字を大へん用ひる、ブラザースフロムジャパンと云ふやうなことを盛に用ひる。スカウト運動は國際的にして同時に國家的のものである。三本指の敬礼。ボーイスカウトは、必ず三本指の敬礼をする。これは世界各國共通である。それは、スカウトには、世界共通の三つの大切な宣誓があるので、それを忘れない爲、それを表はす爲である。その三つとは、第一、神及び皇

帝(米佛等の共和國では「神及び國家」といふ)に盡す。第二、自ら進んで他人を助ける。第三、スカウトのおきてを守り、體を丈夫にする、と云ふのである。スカウトのおきても世界中殆ど同じで、正直にするとか、快活にするとか等、十乃至十二箇條あるのである。

そなへよ、つねに。標語はビーブリーペーアド(Be Prepared)で、即ち一旦緩急の場合は勿論、先度のやうな災害にも勿論、又常に我々は用意がなくてはならぬ。スカウトは「さあ来い！」でなければならぬと云ふのである。

スカウトの意味。なぜボーイスカウトといふかと云ふと、それはこの運動の創始者ベーデン、パウエル將軍が、南

ベーデン、パウエル
西暦一八五七年ロ
ンドンに生れた。

南阿戰爭
南アフリカのトラ
ンスバル共和国
と英國との戰爭
英國の勝利に歸し
た。
(西暦一八九一年)

阿戰爭當時、ボーイのスカウト(斥候)を使つたが、それが大人以上の働をした。其の後英國に歸ると、國では子供の體質が弱くなり、不良少年が多くて困るので、子供を集めてこの



軍將ルエウバンデーベ

運動を始め、ボーイスカウトと名づけたのである。そしてスカウトの意味は平和の斥候といふ意味にしてゐる。即ちスカウトは常に本隊より一步先に進んで、後から来る人の爲に盡すのがその役目である。今より十五年前、パウエル將軍が英國に之を始めて以來、世界中にこの運動が擴まり、世界に二百萬人の團員が居り、手に手を取つ

ウルフカツ
Wolf Cub.

てゐる。

年齢と組織。 年齢は、外國では大抵一様の分け方で、九歳より十二歳までをウルフカツと稱し、十二歳より十八・九・二十歳までをボーイスカウトと稱するのであるが、日本ではこれを「少年團」としたため、年齢を少さく思はれて困る。一番子供の大切な時は、十四五から十七八までの間で、この時こそ心身共に善くなるか悪くなるかの境である。この時の訓練こそ必要である。

また組織は大抵八人を一班として、それに班長を置いて自治せしめ、班が集つて隊となり、隊が集つて團をなすのである。

日本こそ。

日本の少年團は、英・米・佛・伊等のそれに比して、まだ幼稚である。が、善



雪の元節宮前城に於ける少年團の「彌榮」三唱

つてゐる位だ。それ故日本こそこの運動が世界に誇るも

のになつていゝのだと、私は思つてゐる。

二七 安井息軒

森 鷗 外

「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」といふ評判と同時に、仲平さんは醜男だ。」といふかけぐちが清武一郷に傳へられて居る。

仲平の父は、日向國宮崎郡清武村に二段八畝の宅地があつて、そこに三棟の家を建てて住んでゐる。財産としては、宅地を少し離れた處に田畑を持つてゐて、年來、家で漢學を人の子弟に教へるかたはら、耕作をやめずゐたのである。併し仲平の父は三十八の時江戸へ修行に出て、中一年おい

安井息軒
名は衡、通稱仲平、
息軒と號した。徳
川末期の大儒。明
治元年(三三)歿、
年七十八。
森鷗外
名は林太郎、島根
縣の人。醫學博士、
文學博士。大正十
一年歿、年六十一。
仲平の父
安井滄洲。名は朝
完。

飢肥藩
伊東氏。五萬七千
石。日向國(今宮崎
縣)南那珂郡飢肥
はその城下。

て、四十のとき歸國してから、段々飢肥藩で任用せられるやうになつたので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにしてゐる。



仲平は二男である。兄文治が九つ、自分が六つの時、父は兄弟を殘して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人とも毎朝

書物を懷中して畑打に出た。そして外の人や煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。父が始めて藩の教授にせられた頃の事である。十七八

の文治と十四五の仲平とが例の畑打に通ふと、道で行逢ふ人がみな言ひ合せたやうに二人を見較べて、連があれば、連に何事をかさゝやいた。背の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文治と、背の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合な一對に見えたからである。兄弟同時にした疱瘡が、兄は軽く弟は重く、弟は大痘痕おぼたになつて、剩へ右の目が潰れた。父も小さい時、疱瘡をして片目になつてゐるのに、又仲平が同じ不具になつたのを思へば、「偶然」といふものも殘酷なものだと云ふ外ない。

仲平は兄と一しよに歩くのを辛く思つた。そこで朝は少し早目に食事を濟ませて、一足先に出、晩は少し居残つて

仕事をして、一足遅れて歸つて見た。併し行逢ふ人が自分の方を見て連とさゝやくことは止まなかつた。そればかりではない、兄と一しよに歩く時よりも、行逢ふ人の態度は餘程無遠慮になつて、さゝやく聲も常より高く、中には聲を掛けるものさへある。

「見い。けふは猿がひとりでゆくぜ。」

「猿が本を讀むから妙だ。」

「なに、猿の方が猿引よりはよく讀むさうな。」

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

交通の狭い土地で、行逢ふ人は大抵識り合つた中であつた。仲平は一人で歩いて見て、二つの發見をした。一つは、

自分がこれまで兄の庇護の下に立つてゐながら、それを悟

らなかつたといふ事であ

る。今一つは、驚くべ

し、兄と自分とに渾名が

附いてゐて、醜い自分が

猿と云はれると同時に、

兄までが猿引と云はれ

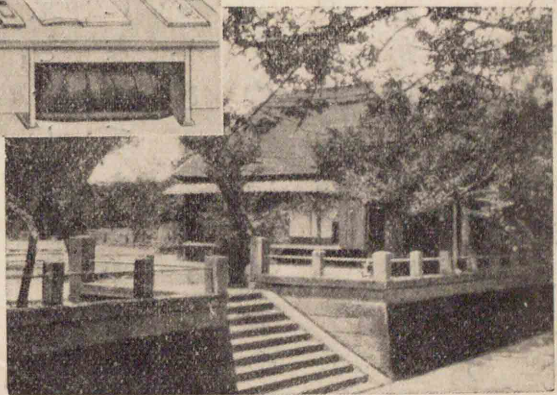
てゐるといふ事である。

仲平はこの發明を胸に

藏めて、誰にも話さなかつたが、その後

は強ひて兄と離れ離れに田畑へ往返しようとはしなかつ

安井息軒と
清武村の舊宅



藏めて、誰にも話さなかつたが、その後

た。

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大
阪へ修行に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだの
である。

仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて清武
村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に着いて、
長屋の間を借りて自炊をしてゐた。儉約の爲に、大豆を
鹽と醬油とで煮て置いて、それを飯の菜にしたのを、藏屋敷
では「仲平豆」と名づけた。中一年置いて、二十三になつた時、
故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の
鋭い若者であつたのに、とかく病氣で、とう／＼二十六歳で

篠崎小竹
名は彌。大阪の人、
江戸時代末期の儒
者、嘉永四年(一五五)
歿、年七十一。

死んだのである。仲平は訃音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

その後仲平は二十六で、江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて昌平饗に入つた。後世の註疏に據らずに經義を究めようとする仲平のためには、古賀より松崎謙堂の方が懐かしかつたが、昌平饗に入るには、林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、背の低い田舎書生は、こゝでも同窓に馬鹿にせられずには濟まなかつた。それでも仲平は無頓着に黙り込んで、獨り讀書に耽つてゐた。座右の柱に、半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀んで見ると、

古賀侗庵

名は煜。肥前の人。幕府の儒官。弘化四年(一八四二)歿、年六十。

昌平饗

徳川幕府直轄の漢學専門の學校。寛永七年に創始され、明治以後廢せられた。

松崎謙堂

名は復。肥後の人。掛川藩の儒者。弘化元年(一八四〇)歿、年七十四。

林

世々幕府の學政を掌つた家。

忍が岡
今の上野公園の地。昌平校は最初この地にあり、後に湯島に移した。



今は音を忍が岡のほととぎす

いつか雲井のよそに名のらん

と書いてあつた。「や、えらい抱負ぢやぞ。」と友達は笑つて去



聖堂講釋

つたが、腹の中ではやゝ氣味悪くも思つた。これは十九の時、漢學に全力を傾注するまで、國文をも少しばかり研究した名残で、わざと流儀ちがひの和歌の眞似をして、同窓の揶揄に酬

いたのである。

仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で、藩主の侍讀にせ

られた。そして翌年藩主が歸國せられる時、供をして歸つた。その年の正月から清武村字中野に藩の學問所が立つことになつて、工事の最中である。それが落成すると、六十一になる父滄洲翁と、去年江戸から藩主の供をして歸つた二十九になる仲平さんが、父子共に講壇に立つ筈である。江戸がへり昌平饜じこみと聞いて、仲平さんは偉くなりなさるだらう。」と評判する郷里の人達も、痘痕があつて、片目で、背の低い男振を見ては、「仲平さんは醜男だ。」とかげことを言はずにはおかなかつた。

大儒息軒先生として、その名を知られるやうになつたの

は、仲平が四十八の頃からである。(鷗外全集)

〇 めりなしや人こそ人といはずともみづから身をや

思ひすつべき

紫式部

あすもまた朝こく起きてつこめばや窓にうれしき

ありあけの月

僧 涌蓮

三計塾の記

安井息軒

三計とは何ぞ。一日の計は朝に在り、一年の計は春に在り、一生の計は少壯の時に在ればなり。何を以て吾が塾に名づけしか。諸生の晏起と春嬉を慮ればなり。凡そ吾が塾に遊ぶ者は、皆此の道に志有る者なり。何すれぞ

三計塾
安井息軒の私塾。

其の晏起と春嬉を過慮するや。人少ければ則ち年に恃み、氣盛なれば則ち物に動く。年に恃みて而して物に動くは、惰嬉の由りて生ずる所なり。惰嬉既に生ずれば、則ち一生の計も亦荒む。故に吾が塾に入る者は、三者の計を思はざるべからざるなり。
(息軒遺稿)

二八 修養三題

柳澤 淇園

柳澤淇園
大和(奈良縣)郡山藩の重臣。名は里恭。修して柳里恭といふ。多才、殊に繪畫に秀でてゐた。寶曆八年(二四二)歿。年五十三。

淀川にて鯉を取るに、漁夫水中に入りて鯉と並び居て、脇へかいこみて浮み出づるを抱鯉と云ふ。近き頃より、事なりとぞ。人を諫むるの道もこれに同じ。始は他人の惡しきことと共に並びゐて、折よきところにて、善におもむか

しめんとすること肝要たるべし。
人を意見するも、大かたの人はその者の非なることを擧げて意見す。いよく容れざるなり。まづその人の功を擧げてこれを賞美し、かゝる功をなしながら、いかでかさるよろしからざることにおもむくや。よろづ任すべき人がらなるを、たゞよろしからざるの志よりして、今までの大功を失へり。その善に歸すべし。とあらば、人必ずその理に伏すべし。

二

江戸にて予が親しく交はりし友に、何某といふ人あり。書を好みて食事の傍にも見臺をすゑて、書籍をひらき置き

て見居けり。其の行篤實にして、常に机上に書をひらけども、決して疊の上におかず、一冊たりとも本箱の出し入れを慎みて、これを戴きて取扱ふこと、丁寧誠に至れりといふべし。

ある書林の店に書籍を竝べおきて、その上を跨ぎ或は踏み越えなどするを見て、かの書林は出世なり難し。といへり。又他の書商の客來りて求むる時は、その書をいたゞきては出し、いたゞきては取入るゝを見て、やがて上もなき書肆となるべし。とて悦びけり。

此の人の詞に、悟るといへば僧法師などの道ばかりのやうに心得たるものあれども、常の人にてても五常をよく悟り

五常
仁義禮智信。

得ざれば、身にも行ひ、人にも教訓せらるゝものにあらず。世に悟る者は稀にして、只知りたる人のみ多し。といへり。實に確言といふべし。

三

或人文盲なる者に意見して、世の交は他の事はいらす、唯堪忍の二字をよく守るべし。と言ふ。文盲の人首を傾け、『かんにん』とは四字にてはべらずや。と指にて數へ、御許には思しちがひなるべし。『かんにん』と四字にてはべり。と言ふ。意見せる人、愚昧の人かな。『堪忍』とは『たへしのぶ』と書きて二字なり。と言へば、また首を傾け、『たへしのぶ』ならばまた一字ふえたり。五字となりぬべし。何と仰ありとも、我等は

四字と思ひはべれば、四字にてかんにんは致しはべるなり。」
と言ふ。かの意見せる人また言ふ、汝が如き愚昧の文盲は
實にさとしがたし。人に似て蟲同様なり。おのれが氣ま
まにすべし。」と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも仰
あるべし。我等は『かんにん』の四字を知りはべれば、悪口せ
られても少しも腹立ちにはべらざるなり。」とて、笑ひるたりき
とぞ。(雲萍雜誌)

二九 國歌と國旗

芳賀矢一

國歌「君が代」の作曲は、一度外國人が手を著けて不成功に
終つたのを、宮内省雅樂部の林廣守翁が、全然古代の雅樂に

芳賀矢一
國文學者。文學博
士。福井市の人。
昭和二年歿。年六
十一。
林廣守
宮内省雅樂部副
長。大阪市の人。
明治二十九年歿。
年六十六。

則つて作つたもので、割合に新しいに係らず、非常に尊嚴な
ものである。



この「君が代」の吹奏される時、我等の心には我が國體と歴
史とを思つて、非常に懐かしい、さう
林 して嬉しい情が湧立つのを覺える。
廣 その曲は誠に平和で、溫情に満ちて
守 居つて、何となく、義は君臣にして情
は父子」といふ感を起させる。その

歌の内容が、たゞ君が代を千代に八千代にと祝ふ所に、我が
國體の表はれてゐるのが嬉しい。國歌は最もよくその國
體を表はす。西洋諸國の國歌を見れば、同じく、皇帝に幸あ

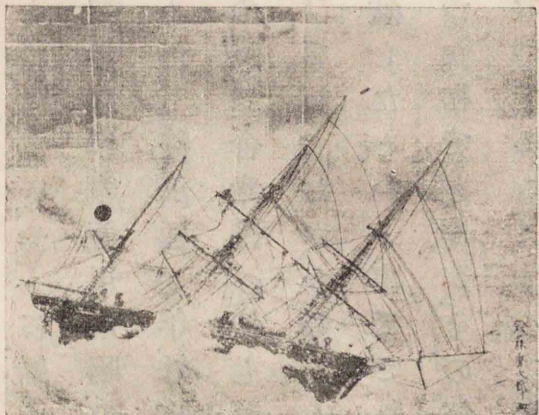
れ。」と歌ふ歌にも、それを神に祈るのである。また帝王を祝する外に、或は國民を歌ひ、或は國土を歌ふ。民衆から成立つた王室、國土とは全く別である王室を戴く國民としては當然な事である。

「君これ神」なら、我が國に於ては、天皇の御長壽を更に神に祈る必要はない。「君これ國」なる我が國に於ては、君の祝福の外に別に國土の祝福を祈る必要はない。「君これ父」なる我が國に於ては、皇室の繁榮より外に、人民の幸福を願ふ必要はない。

大君の御代が長久であるといふうちに、人民の幸福も、國土の繁榮も含まれてゐる。單に天皇の御長壽を祝賀する

のが、即ち我が國家、我が臣民のあらゆる祈願を含んでゐる所に、日本の國體があるのである。三十一文字の短い歌、こ

れが數千年來の國體美を表はし、九千萬人の赤誠を表はした國歌である。



咸臨丸

カ合衆國の使節ペリーの來朝するや、これに刺戟されて、幕

ペリー
アメリカ合衆國の
海軍提督。(西曆一
七九四—一八五八
年)

德川齊昭
 水戸第九代の藩主。景山と號する。萬延元年(五〇)歿。年六十一。烈公と諡した。
 萬延元年
 第二百一十代孝明天皇の御代。徳川家茂の治世。
 新見豊前守
 安政六年外國奉行となり。翌萬延元年正月村垣淡路守・小栗豊後守等と共に米國軍艦に乗り米國に使した。
 咸臨丸
 勝安芳・木村圖書等が之に搭乘した。

府は多年厲行してゐた大船製造の禁を解いたので、外國船と紛れないやうに、船印を制定する必要が起つた。そこで翌年水戸の徳川齊昭の議を納れて、日の丸を以て船印と定めた。後萬延元年、外國奉行新見豊前守正興が、批准書交換の爲に合衆國へ使した時、同航した咸臨丸にこの船印を用ひて行つたが、かの國人はそれを見て、意匠の壯烈なのに驚歎したといふ事で、これが抑、日章旗の世界に輝くやうになつた初であるが、その單純な様式に於て、諸外國の國旗と異なつてゐる。すべてに於て簡單を喜び、清潔を愛する國民の趣味には最もよく合してゐる。さうして日本といふ意味をば最もよく表はしてゐる。

日本は東半球の最東部に國を成してゐるので、朝な夕なさし昇る初日の光は、他の諸國に先だつて、第一に我が帝國を照すのである。日本といふ國名も誠に現實である。皇祖天照大神は即ち日神であるといふのが、我が國祖先の信念であつた。この歴史もまた國旗の上に表はれてゐる。日の丸は日本國の象徴である。さうしてまた日本人の赤心「明き淨き心」の象徴とも見られるのである。君が代の國歌の歌はれる所、日の丸の國旗の翻る限り、我が皇室の稜威が輝き、我が國民の活動があるのである。

國語讀本 卷一 終

大正十三年十二月十六日印
 大正十三年十二月十九日發
 大正十四年二月二十一日訂正再版印刷
 大正十四年二月廿四日訂正再版發行
 昭和三年十一月一日改訂印刷
 昭和三年十一月四日改訂發行
 昭和四年三月十五日改訂再版發行
 昭和七年十月廿五日改訂三版發行
 昭和八年二月廿三日改訂四版發行
 昭和九年七月十九日改訂五版印刷
 昭和九年七月二十一日改訂五版發行

國語讀本 新制版

(各卷 定價金六十錢)

編者	上田 萬年
同	榮田 猛猪
同	鹽野 新次郎
發行者兼印刷者	株式會社 成社
右代表者	布津 純一
印刷所	啓成社印刷部



發行所

株式會社 啓

成社

東京市麴町區丸ノ内三丁目六番地

電話丸ノ内(23)二六八六番
振替東京一二〇五五番

本館
發行

諸君
注意

本館
發行

本館
發行

本館
發行



本館
發行

本館
發行

